福岡市埋蔵文化財調査報告書第779集

# 立花寺5

－立花寺遺跡群第5・6次調査報告－

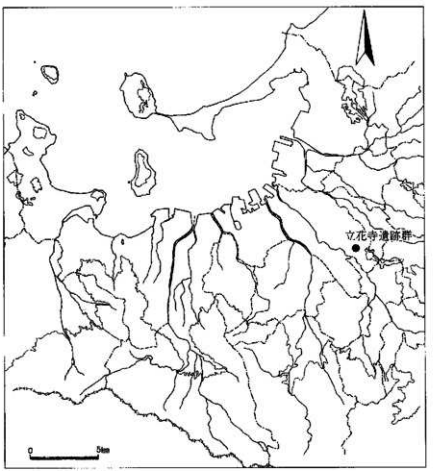
2003

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第779集

# 立花寺5

－立花寺遺跡群第5・6次調査報告－




2003

福岡市教育委員会

# 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する立花寺遺跡群第５・６次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで福岡市農林水産局をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成15年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　生田　征生

# 例　言

1．本書は福岡市教育委員会が平成12・13年度に博多区立花寺２丁目地内において実施した立花寺遺跡群第５・６次調査の発掘調査報告書である。
2．遺構の実測は長家伸、坂本真一が行った。
3．遺物の実測は長家、坂本、林田憲三、小田裕樹、古澤義久、撫養久美子が行った。
4．製図は長家、坂本、小田、古澤、北川貴洋、撫養、濱石正子が行った。
5．写真は長家が撮影した。
6．本書で用いる方位は磁北であり、座標北から６°西偏し、真北から６°18′西偏する。
7．本書で用いる遺構番号は第５・６次調査全体で通し番号にしている（第５次調査：001～100　第６次調査：101～　いずれも欠番あり）。また報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物（SB）、竪穴住居跡（SC）、土坑（SK）、溝（SD）、井戸（SE）、橋状遺構（SA）、不明遺構及び鍛冶関連遺構（SX）、ピット（SP）である。
8．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9．本書の編集・執筆は長家が行った。

| 遺跡調査番号 | 0050 | | 遺跡略号 | RGG－５ | |
|---|---|---|---|---|---|
| 所　在　地 | 博多区立花寺２丁目地内 | | | 分布地図番号 | 11―0038 |
| 開発面積 | 20000㎡ | 調査対象面積 | 573㎡ | 調査面積 | 416㎡ |
| 調査期間 | 平成12年11月15日～平成13年１月13日 | | | 事前審査番号 | 11－１－242 |

| 遺跡調査番号 | 0106 | | 遺跡略号 | RGG－６ | |
|---|---|---|---|---|---|
| 所　在　地 | 博多区立花寺２丁目地内 | | | 分布地図番号 | 11―0038 |
| 開発面積 | 20000㎡ | 調査対象面積 | 1258㎡ | 調査面積 | 840㎡ |
| 調査期間 | 平成13年５月17日～平成13年10月20日 | | | 事前審査番号 | 12－１－27 |

# 目　次

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査にいたる経過……1
　2　調査体制……1
Ⅱ　立地と環境……2
Ⅲ　第５次調査の記録……5
　1　調査概要……5
　2　遺構と遺物……5
　　1）井戸……5
　　2）掘立柱建物……13
　　3）溝……15
　　4）その他の遺物……27
　　5）小結……27
Ⅳ　第６次調査の記録……28
　Ⅰ・Ⅱ区の調査……28
　1　調査概要……28
　2　遺構と遺物……28
　　1）竪穴住居跡……28
　　2）土坑……28
　　3）溝……35
　　4）不明遺構……37
　　5）包含層出土遺物……42
　Ⅲ区の調査……43
　1　調査概要……43
　2　遺構と遺物……51
　　1）掘立柱建物……51
　　2）竪穴住居跡……59
　　3）土坑……62
　　4）井戸……69
　　5）鍛冶関連遺構……70
　　6）溝……70
　　7）横状遺構……80
　　8）その他の遺物……82
　　9）小結……82

## 挿図目次


第１図　調査区位置図１（1/25000）……3
第２図　調査区位置図２（1/4000）……4
第３図　調査区位置図３（1/1000）……折り込み
第４図　調査区西壁土層図（1/60）……6
第５図　調査区全体図（1/100）……折り込み
第６図　SE001実測図（1/40）……8
第７図　SE001出土遺物実測図１（1/3）……10
第８図　SE001出土遺物実測図２（1/3、1/6）……11
第９図　SB011実測図（1/60）……12
第10図　SB011出土遺物実測図（1/3）……13
第11図　SD002東壁土層図（1/60）……14
第12図　SD002東端遺物出土状況実測図（1/3）……15
第13図　SD002出土遺物実測図１（1/3）……17
第14図　SD002出土遺物実測図２（1/3）……18
第15図　SD002出土遺物実測図３（1/3）……19
第16図　SD002出土遺物実測図４（1/3）……20
第17図　SD002出土遺物実測図５（1/8）……21
第18図　SD002出土遺物実測図６（1/8）……22
第19図　溝断面図（1/40）……23
第20図　SD003、005、006、009、025出土遺物実測図（1/3）……25
第21図　包含層出土遺物実測図（1/3）……26
第22図　Ⅰ区上面遺構全体図（1/100）……折り込み
第23図　Ⅰ区下面遺構全体図（1/100）……折り込み
第24図　西壁土層図（1/60）……29
第25図　Ⅱ区全体図及び出土遺物実測図（1/100、1/3）……30
第26図　SC111及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……31
第27図　SK101、102及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……32
第28図　SK103、108、109、110及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……34
第29図　SD104、106及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……36
第30図　SX107実測図（1/40）……37
第31図　SX107出土遺物実測図１（1/3）……38
第32図　SX107出土遺物実測図２（1/3）……39
第33図　SX107出土遺物実測図３（1/3）……40
第34図　包含層出土遺物実測図１（1/3）……41
第35図　包含層出土遺物実測図２（1/3）……42
第36図　Ⅲｂ区１面全体図（1/100）……44
第37図　Ⅲａ区上面及びⅢｂ区２面全体図（1/100）……折り込み
第38図　Ⅲｂ区３面全体図（1/100）……46
第39図　Ⅲｂ区４面全体図（1/100）……47

第40図　Ⅲb区5面全体図（1/100）……49
第41図　Ⅲa区下面及びⅢb区6面全体図（1/100）……折り込み
第42図　Ⅲc区全体図及び土層図（1/100、1/40）……51
第43図　Ⅲ区土層図（1/60）……折り込み
第44図　SB191及び出土遺物実測図（1/60、1/3）……53
第45図　SB195及び出土遺物実測図（1/60、1/3）……54
第46図　SB192及び出土遺物実測図（1/60、1/3）……55
第47図　SB193実測図（1/60）……56
第48図　SB193出土遺物実測図（1/3）……57
第49図　SB194及び出土遺物実測図（1/60、1/3）……58
第50図　SC163、169及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……59
第51図　SK155、157及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……60
第52図　SK158、161及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……61
第53図　SK164及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……63
第54図　SK168、174、175、179、184実測図（1/40）……64
第55図　SK168、174、175、179、184出土遺物実測図（2/3、1/3）……65
第56図　SE173及び出土遺物実測図（1/40、1/3）……66
第57図　SX171、172及び出土遺物実測図（1/40、1/20、1/3、2/3）……68
第58図　SD152、156断面図（1/40）……70
第59図　SD152、156出土遺物実測図（1/3）……71
第60図　SD162土層図（1/60）……72
第61図　SD162出土遺物実測図（1/3）……73
第62図　SD165、167、170及び出土遺物実測図（1/40、1/20、1/3）……74
第63図　SD180、181、182、187、189断面図（1/40）……75
第64図　SD180、182、189出土遺物実測図（1/3）……76
第65図　SA196及び出土遺物実測図（1/80、1/3）……77
第66図　ピット出土及び包含層出土遺物実測図1（1/3）……78
第67図　包含層出土遺物実測図2（1/3）……79
第68図　包含層出土遺物実測図3（1/3）……80
第69図　包含層出土遺物実測図4（1/3）……81

写真目次


写真 1　調査区中央谷部全景（北から）……6
写真 2　調査区西壁土層……6
写真 3　調査区全景（西から）……7
写真 4　調査区全景（北から）……7
写真 5　SE001（西から）……9
写真 6　SE001井筒 1 段目土層（西から）…9
写真 7　SE001井筒 1 段目（西から）……9
写真 8　SE001井筒 2 段目（西から）……9
写真 9　SE001井筒 3 段目（西から）……9
写真10　SE001掘り方内板材・杭検出状況（西から）……9
写真11　SB011（北から）……13
写真12　調査区北半（西から）……13
写真13　SD002（西から）……14
写真14　SD002東端土層……14
写真15　SD002東端遺物出土状況（南から）16
写真16　SD002東端遺物出土状況（北西から）……16
写真17　SD002東端遺物出土状況（西から）16
写真18　SD002東端完掘後（北から）……16
写真19　SD002出土遺物(83)……21
写真20　SD002出土遺物(84)……22
写真21　SD025（東から）……24
写真22　SD025土層……24
写真23　包含層出土遺物（109）……26
写真24　調査区上面全景(西から)……折り込み
写真25　調査区完掘後全景(西から)…折り込み
写真26　谷部西壁土層……29
写真27　西壁南半土層……29
写真28　Ⅱ区全景（北から）……30
写真29　SC111（西から）……31
写真30　SC111土層……31
写真31　SK101（東から）……33
写真32　SK101土層……33
写真33　SK102（東から）……33
写真34　SK102土層……33
写真35　SD106（西から）……36
写真36　SX107（西から）……37
写真37　SX107出土遺物（184）……40
写真38　包含層出土遺物（207）……42
写真39　Ⅲb区1面全景（南から）……44
写真40　Ⅲb区2面全景（南から）……45
写真41　Ⅲa区上面全景（西から）……45
写真42　Ⅲb区3面全景（西から）……48
写真43　Ⅲb区4面全景（西から）……48
写真44　Ⅲa区下面全景（西から）……50
写真45　Ⅲb区6面全景（西から）……50
写真46　Ⅲa区西側拡張部分（北から）……50
写真47　Ⅲc区東壁土層……51
写真48　Ⅲa区南壁土層……52
写真49　Ⅲa区北壁土層……52
写真50　SB192（南から）……54
写真51　SB192出土遺物（221）……55
写真52　SB192内SP749遺物出土状況（南から）……55
写真53　SB193、194（西から）……57
写真54　SB193（北から）……57
写真55　SB194（西から）……58
写真56　SC163（西から）……59
写真57　SK155（西から）……61
写真58　SK155土層……61
写真59　SK157（西から）……62
写真60　SK158（北から）……62
写真61　SK164（南から）……62
写真62　SK164土層……62
写真63　SK184（西から）……64
写真64　SK179上層……64
写真65　SE173、SK174（東から）……66
写真66　SE173（南から）……66
写真67　SX171上層……69
写真68　SX172上層……69
写真69　Ⅲa区谷部東壁土層……72
写真70　SD162（東から）……72
写真71　SD170（東から）……74
写真72　SD170内検出石組み（北から）……74
写真73　SP532出土遺物（350）……78
写真74　出土新羅土器……83
写真75　作業風景……83

# Ⅰ　はじめに

## 1　調査にいたる経過

平成11年7月29日付け農振第198号により、福岡市農林水産局農林部農業振興課長から教育委員会埋蔵文化財課長宛に福岡市博多区立花寺2丁目地内における東部リフレッシュ農園整備事業に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号11－1－242）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である立花寺遺跡群（分布地図番号11－0038・遺跡略号 RGG）に含まれているところである。このため埋蔵文化財課では申請者と協議の上、平成12年3月22日に申請地内の試掘調査を行い、柱穴等の遺構を確認した。更に平成12年9月8日に2度目の試掘調査を行い、対象地内の遺構分布確定作業を行った。これらの結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い（教埋526号　平成12年10月11日）、その取り扱いについて協議を行うこととした。協議の結果、駐車場・建物建設部分及び設計上土地の切り下げが行われる部分については遺構の破壊が避けられないため、平成12・13年度に発掘調査、平成14年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。また遺構の破壊に至らない地点においては現状保存とすることとした（調査地点・現状保存地点等については第3図参照）。

調査期間は第5次調査が平成12年11月15日～平成13年1月13日（調査番号0050）、第6次調査が平成13年5月17日～平成13年10月20日（調査番号0106）である。調査面積は第5次調査が416㎡、第6次調査が840㎡である。遺物は第5次調査がコンテナ23箱、第6次調査がコンテナ67箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては農林水産局をはじめとして関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

## 2　調査体制

事業主体　福岡市農林水産局農林部農業振興課
調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文化財課長　　山崎純男
　　調査第2係長　　力武卓治（前任）　田中芳夫（現任）
調査庶務　文化財整備課　御手洗清
調査担当　調査第2係　長家伸

なお調査・整理作業には多くの方々にご協力を頂いた。ここで感謝の意を表したい。

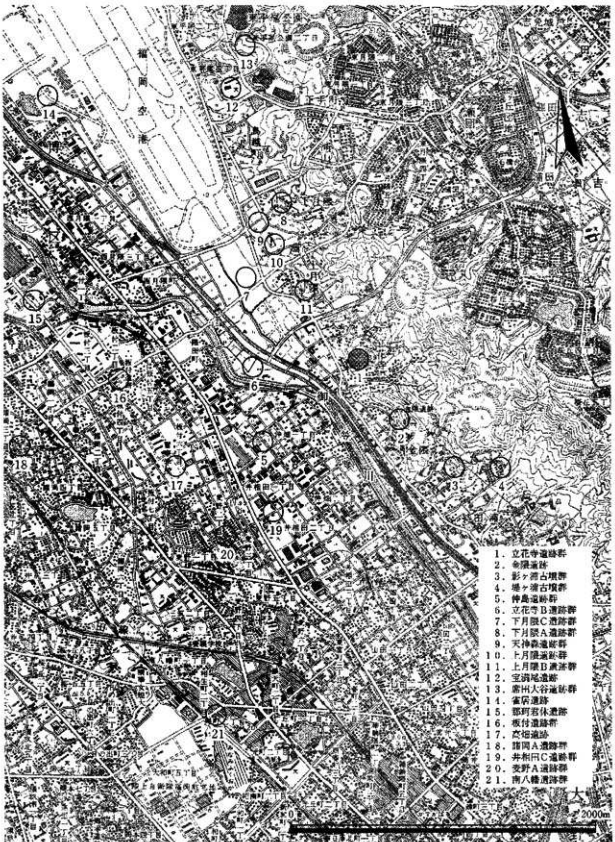
# Ⅱ　立地と環境

立花寺遺跡群は福岡平野の東を画する月隈丘陵の西側斜面上に立地する。月隈丘陵は四王寺山から続く標高20～200mの山地性を示す丘陵地で、御笠川の中・下流域東岸に位置し、現在では糟屋郡との分水嶺をなしている。表層地質は第三紀層の堆積岩により構成されている。丘陵斜面部分は解析作用を顕著に受け、丘陵頂部を独立丘上に画している。また丘陵東側前面は沖積扇状平野を形成している。これまで丘陵上及び丘陵西側沖積平野部分では各種開発行為に伴い発掘調査が行われており、ここで簡単に本遺跡群周辺の調査事例についてまとめておきたい。

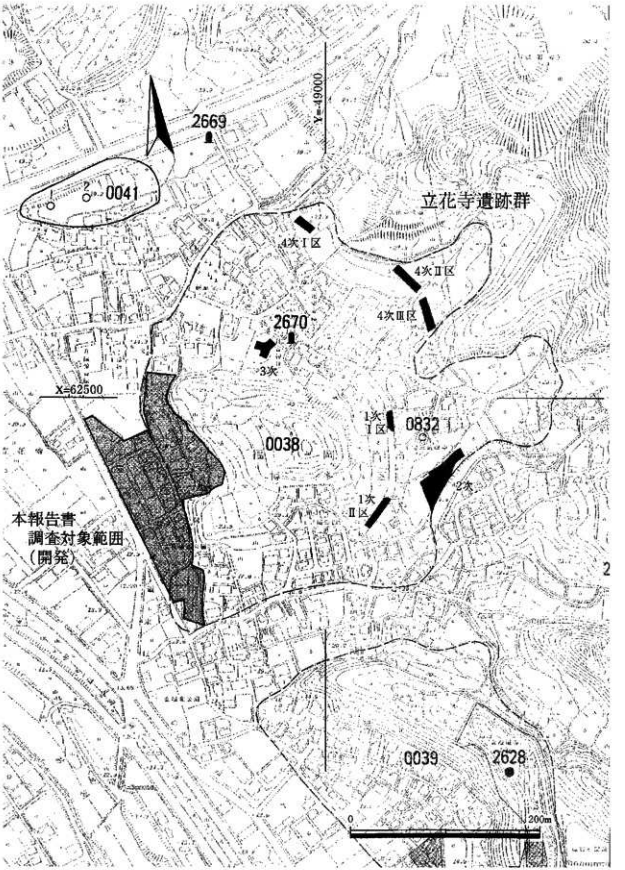
周辺の遺跡立地は前述のように、丘陵上に位置するものと丘陵前面御笠川右岸に形成される沖積地上に立地するものの２者に分類できる。まず丘陵上に位置する遺跡群について見ていきたい。遺構が検出されるのは弥生時代前期からである。宝満尾遺跡、影ヶ浦古墳群、持田ヶ浦古墳群、上月隈Ｂ遺跡群の調査によって前期～中期初頭を主体とした貯蔵穴群を確認しているが、同時期の住居跡等については明確ではない。中期以降生活遺構の検出例及び遺物出土量は増加する。上月隈遺跡群、久保園遺跡、席田大谷遺跡群、中尾遺跡群、赤穂ヶ浦遺跡等が知られており、久保園遺跡では中期後半の大型建物（５間×８間）が確認されている。また青銅器鋳型も赤穂ヶ浦遺跡（横帯文銅鐸）が知られ、席田大谷遺跡群では石製銅戈鋳型模造品が出土しており生産関係の遺物も散見される。弥生時代の埋葬関連遺構は下月隈天神森遺跡で前期前半～後半の木棺墓が23基及び前期中頃を主体とし一部中期中頃までの甕棺墓44基を確認する。中期～後期には土坑墓、甕棺墓、石蓋土坑墓が丘陵各所に営まれ数的にも激増する。主な遺跡を列挙すると席田青木遺跡、宝満尾遺跡、上月隈遺跡群、下月隈Ｂ遺跡群、金隈遺跡等が知られている。上月隈遺跡群３次調査では中期後半のST007より中細銅剣１口、ガラス管玉20数点が出土している。宝満尾遺跡では後期の各土坑墓からは前漢鏡、素環頭刀子、ガラス管玉等が出土している。古墳時代になると丘陵各所に群集墳が造営される。丘陵北側の宝満尾古墳、席田大谷古墳群、丸尾古墳群、天神森古墳群等では５～６世紀の数基で構成される小群が形成され、南側の堤ヶ浦古墳群、持田ヶ浦古墳群、影ヶ浦古墳群では数10基単位の大規模な古墳群が認められる。古代では立花寺遺跡群２次調査で確認された掘立柱建物群と初期輸入陶磁器が知られる。ほかに緑釉陶器、権等が出土しており官衙の可能性も考えられている。文献資料によれば古今著聞集に収められる和歌に薩田駅が詠まれており、周辺に官道に伴う駅が存在した可能性が指摘されている。中世～近世にかけては立花城の出城と考えられる稲居塚城が上月隈村に所在したと伝えられている。

沖積地部分の調査では立花寺Ｂ遺跡群、下月隈Ｃ遺跡群、雀居遺跡の調査が行われている。下月隈Ｃ遺跡群では沖積地上の微高地に突帯文期から集落が展開を始め、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて大規模な集落を構成する。また水田遺構についても弥生時代後期～古墳時代前期以降、古代・中世に位置付けられる各水田面が確認されている。雀居遺跡においても集落の形成については下月隈Ｃ遺跡群と同様の推移をたどっている。古代に位置付けられる遺物としては、立花寺Ｂ遺跡群出土の初期輸入陶磁器群、下月隈Ｃ遺跡群出土の木簡等がある。下月隈Ｃ遺跡では近年の調査により８世紀後半代に位置付けられる流路から「皇后宮職」が記された木簡の他、人形、斎串、墨書土器等の遺物が出土している。詳細は本報告に拠りたいが、周辺地域で古代に位置付けられる官衙的施設の存在を伺うことができる。

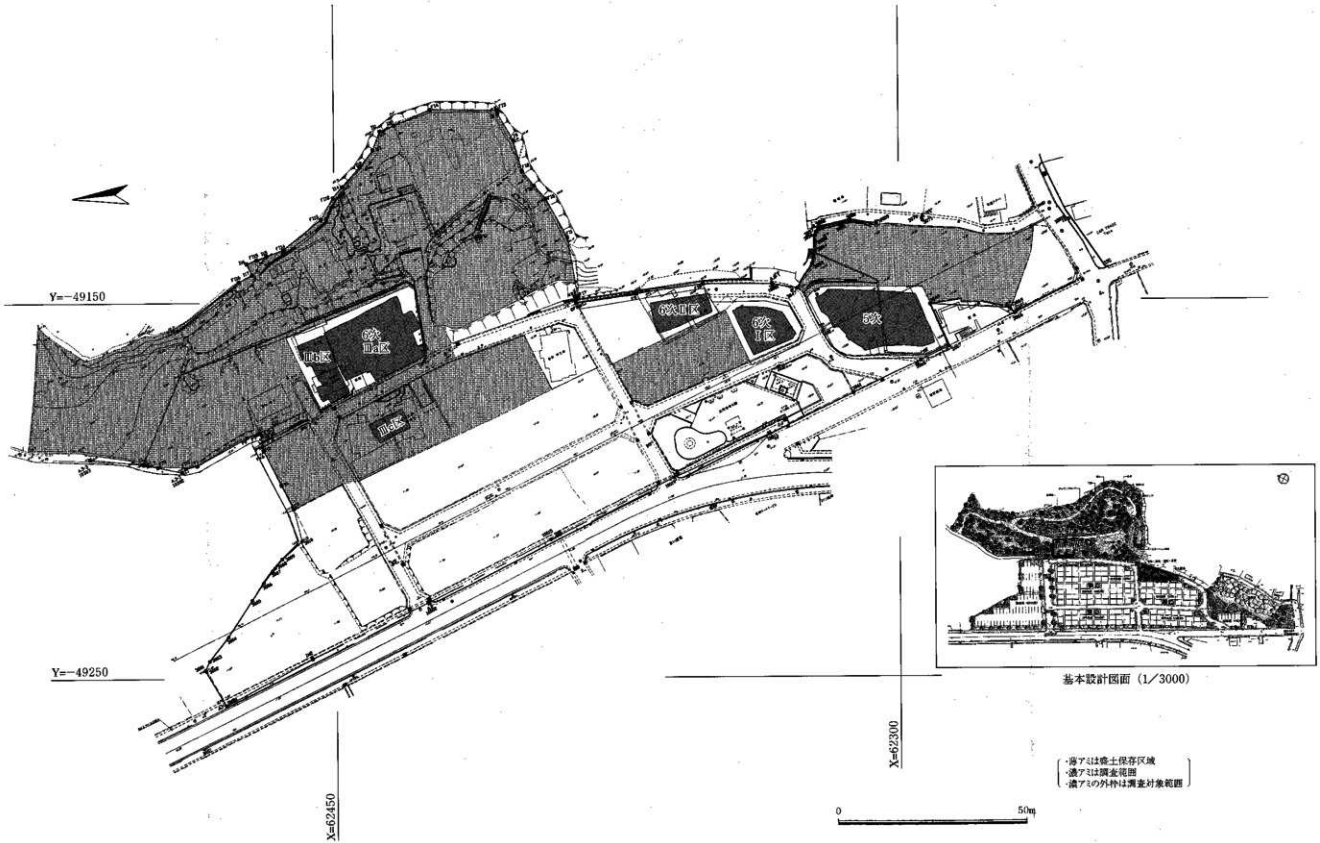
以上の様に立花寺遺跡群周辺では各時代の濃密な遺構群が確認されており、今後、各調査成果をつみ重ねた考察が必要とされる。




第１図　調査区位置図１（1/25000）




第２図　調査区位置図２（1/4000）




第３図　調査区位置図３（1/1000）

# Ⅲ　第５次調査の記録

## １　調査概要

５次調査の対象地は事業地の南端に位置する駐車場計画地である（第３図参照）。先行工事を行う必要上、平成12年度に調査を行った。対象地は現況で東から西に向かった傾斜地で、丘陵西側斜面部にあたり、西側前面の沖積地はこの部分では認められない。試掘調査と周辺の聞き取り調査によれば調査地点の東側現状保存区域は数10年前まで墓所として使用されていたとのことで、盛土内からは墓石の出土も見られた。調査対象面積は573㎡、調査面積は416㎡である。

発掘調査は重機による表土除去から開始した。盛土を60㎝～80㎝程除去すると調査地北側及び南側では地山の砂礫混じりの黄褐色土が露出した。中央部分は開析により浅い谷部となり、自然堆積による包含層が形成されている（第４図）。包含層上面（第４図　１層上面）で遺構検出を行ったが、明瞭な遺構を確認できなかったため包含層の東側半分を更に掘り下げた。この過程で谷部中央部に弥生時代中期後半掘削の溝 SD002を確認したため、包含層南半分は人力による掘り下げを行った。この過程でも包含層中では遺構を確認することはできず、結果的には包含層を全て除去した地山面での遺構確認となっている。なお谷はSD002の掘削時期である弥生時代中期後半までには開析されており、中世前半以前には完全に埋没しているようである（包含層１層中から白磁破片が出土するが、検出し得なかった遺構に伴う可能性もある）。また南北の丘陵高所部分では中世前半の井戸（SE001）・溝（SD008・025）、古墳時代後期の掘立柱建物（SB011）・溝（SD005・006・009他）、その他ピットが確認されている。ピットからの出土遺物の大半は小田編年Ⅳ～Ⅵ期に位置付けられる土師器、須恵器である。以上のように検出遺構及び出土遺物は弥生時代中期後半、古墳時代後期～飛鳥時代、中世前半の大きく３時期に大別することができる。

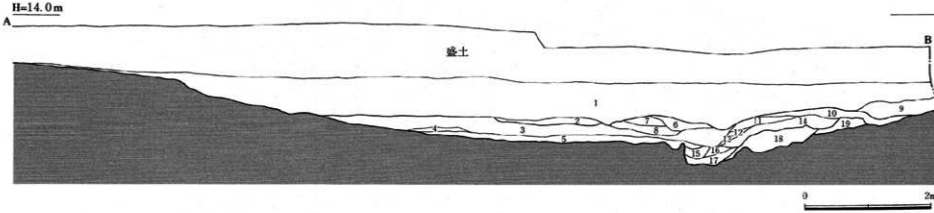
## ２　遺構と遺物

### １）井戸（SE）

SE 001（第６図）

調査区北端で検出する。掘り方北側半分は調査区外にあり未掘となる。掘り方は径5.7ｍの略円形を呈する。掘り方は検出面から1.8ｍまでは45°程の傾斜で掘削されているが、中央部の井筒埋設部分はほぼ真下に掘り下げている。掘削深は検出面から3.1ｍ程で、掘り方底面標高は9.75ｍである。井筒はスギもしくはヒノキの板材を桶組みにしたものを使用している。板材は遺存状態の良好なもので長さ90㎝弱、幅12㎝、厚さ３～５㎝で側面及び小口面も丁寧な面取りを行っている。外面及び内面は横幅方向に極僅かな弧を描いて成形されている。また桶組み外面には箍がはめられておりいずれも竹製である。桶組みは３組遺存しており上部から１段目・２段目、最下段を３段目として取り上げを行った。１段目は標高12ｍ付近から確認できる。20枚の板材を使用する。板材の上部は腐食により旧状を保っていないが下端面はよく保存されている。板材残存長は68～75㎝程度である。板材下端面から12㎝及び50㎝の外面に竹製の箍がはめられている。２段目は18枚で構成される。最も遺存状態が良好で桶組みが十圧により裾広がりになっているがおおよそ旧状を保っている。箍は下端面から10㎝と50㎝の２箇所にはめられている。３段目は土圧により東側半分が崩壊している。板材18枚により構成される。箍は上端面から20㎝のところに一箇所確認したのみで下段の箍は確認できなかった。

井筒内埋土からは標高10.3ｍ前後で被熱痕跡が残る人頭大の礫が10数個まとまって出土しており、井戸の上部構造に石組みを行った可能性も考えられる。また掘り方埋土には井筒に沿って明瞭に立ち




1．茶褐色砂質土
（親指大の小礫を含む）
古墳－中世包含層
2．1層にほぼ同じ
3．粗砂に3cm角の礫を非常に多く含む
4．明茶褐色砂質土～シルト
5．灰白色粗砂
6．茶褐色シルト
7．3層に同じ
8．暗褐色砂質土（小礫含む）
9．1層よりやや暗い
10．暗褐色シルト（6層に近い）
（一部黒褐色）
11．暗褐色砂質土（粗砂多い）
12．黒褐色砂質土
13．11層に同じ
14．淡茶褐色砂質土（小礫含む）
15．黒色粘質土
16．黒褐色粘質土
17．黒灰色粗砂～砂質土
SD002埋土
18．黒色シルト
19．茶褐色砂質土
（3cm角の礫を含む）

第4図　調査区西壁土層図（1/60）

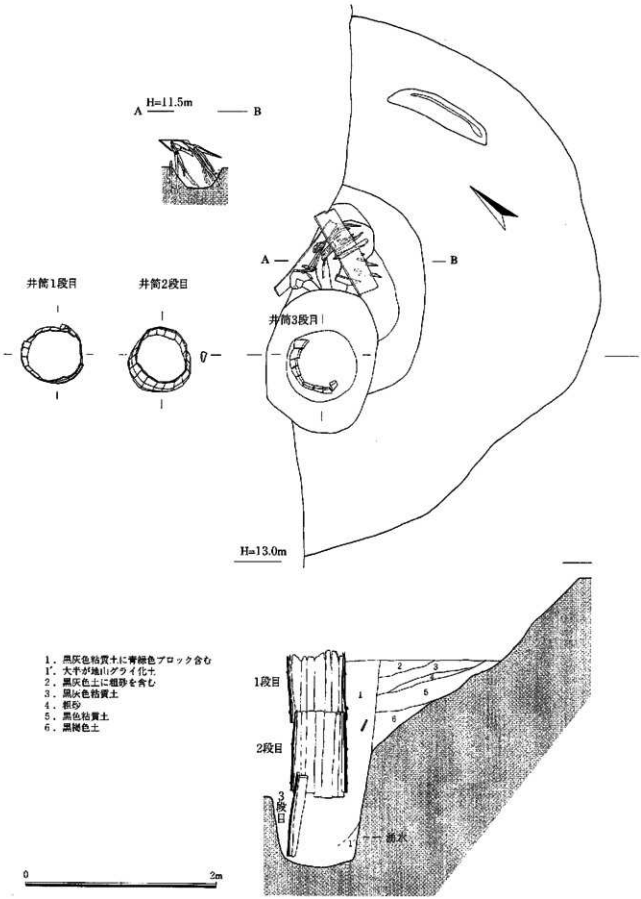
写真1　調査区中央谷部全景（北から）

写真2　調査区西壁土層

第5図　調査区全体図（1/100）

写真３　調査区全景（西から）

写真４　調査区全景（北から）




第6図　SE001実測図（1/40）

写真５　SE001（西から）

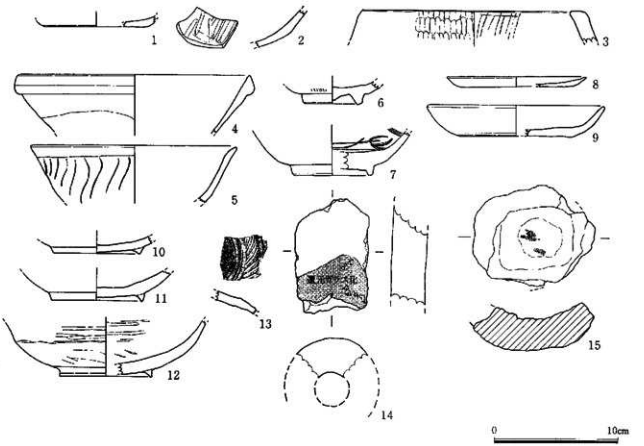
写真６　SE001井筒１段目土層（西から）

写真７　SE001井筒１段目（西から）

写真８　SE001井筒２段目（西から）

写真９　SE001井筒３段目（西から）

写真10　SE001掘り方内板材・杭検出状況（西から）

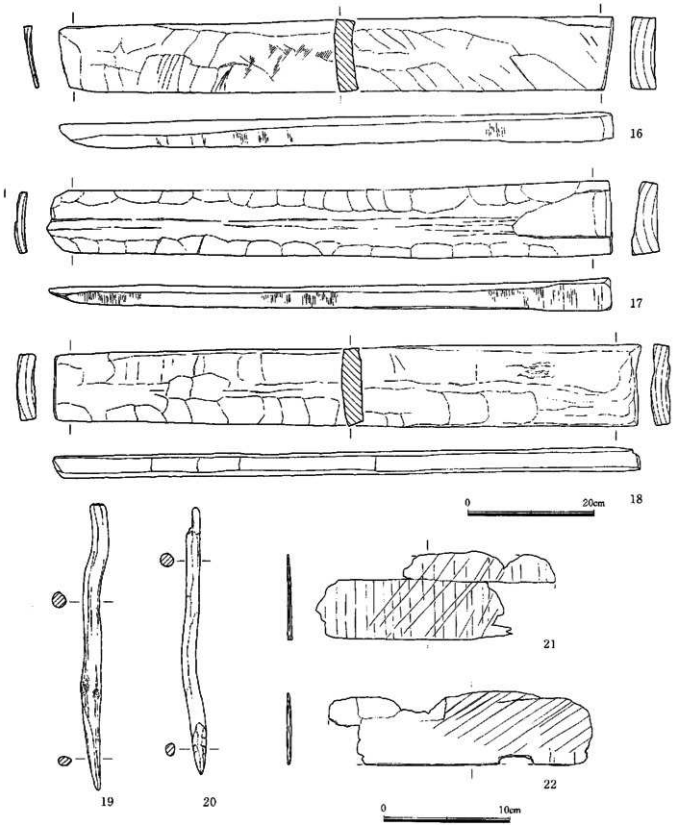



第７図　SE001出土遺物実測図１（1/3）

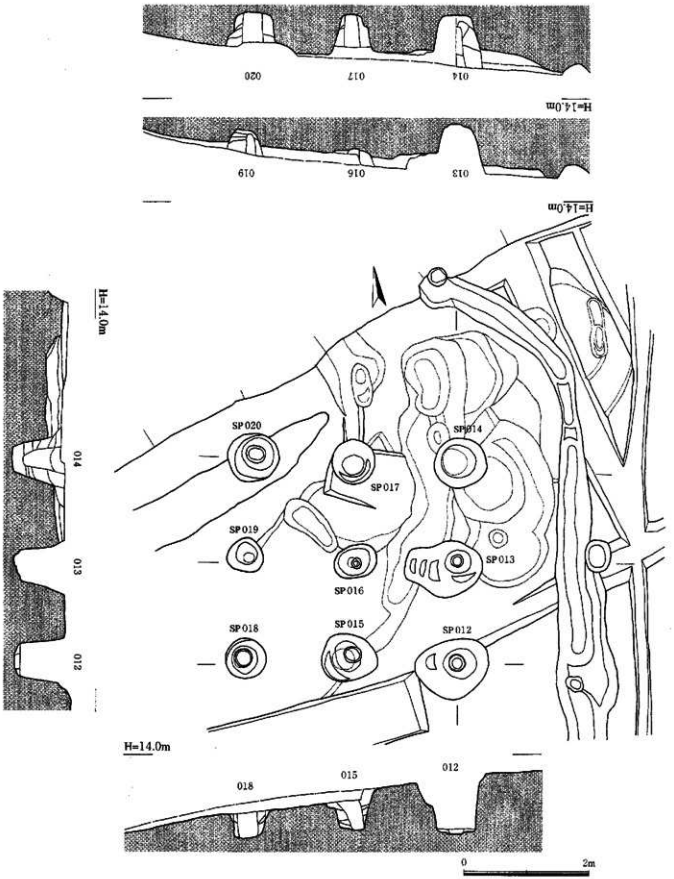
上がる土層が見られる（１層）。井筒埋設時に土留めを行い井筒周囲の埋め立てを先行させ（１層）、後に外周から土砂を流し込み完全に掘り方を埋めていく（２～６層）ものと考えられる。また掘り方北東側には径３㎝程の自然木の端部を削り杭としたものを20本程打ち込み、そこに板材を据えているが板材を杭で固定している状況は認められない。周辺には自然木、木器破損品も多くランダムに投棄されており、桶埋設時に土留めに関連した構造物の可能性を考えているが、不明な点も多く今後類例の増加を待ちたい。遺物は掘り方出土が主体で井筒内からは極少量しか出土していない。陶磁器、土師器、須恵器のほか瓦器、滑石製石鍋、羽口、椀形鍛冶滓等が出土している。陶磁器は青磁が少量で白磁が主体となる。また土師器坏・皿は外底面糸切りである。12世紀中頃～13世紀前半代に位置付けられよう。

出土遺物（第７・８図）　１～３は井筒出土、４～15は掘り方出土である。また16～18は桶組み材、19～22は掘り方内十留め状構造物内出土木製品である。

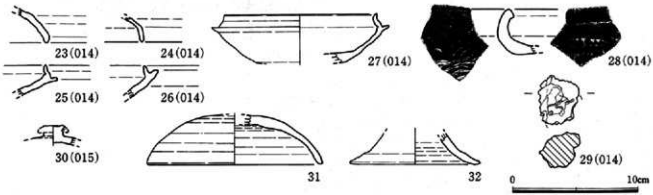
１は土師器皿である。外底面糸切りを行う。２は瓦器椀である。内面に磨き痕が残る。３は滑石製石鍋の口縁部破片である。４・５は白磁碗である。４はⅣ類である。５は外面に片切彫の文様を施す。体部は中位で丸みを帯び、端部を僅かに外反させる。６・７は青磁碗である。６は同安窯系である。７は龍泉窯系で外底面の一部まで施釉される。内面にヘラ描きの文様が施される。８は土師器皿、９は坏である。外底面は糸切りである。10～12は瓦器椀である。13は須恵器壺破片である。沈線間に刺突文を巡らせる。14は羽口である。表面に還元帯が認められる。15は椀形鍛冶滓である。外底




第８図　SE001出土遺物実測図２（19～22は1/3、その他は1/6）




第9図　SB011実測図（1/60）




第10図　SB011出土遺物実測図（1/3）

写真11　SB011（北から）

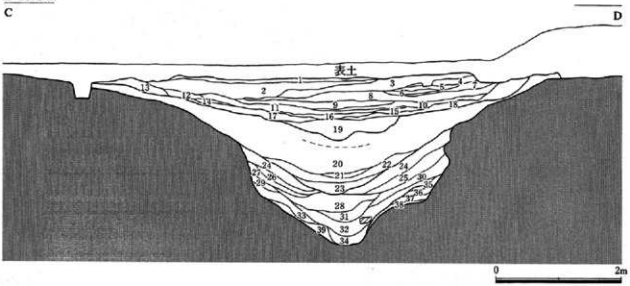
写真12　調査区北半（西から）

面には炉壁粘土・砂粒が付着する。上面には２次的に砂粒が付着しているが、木炭痕が認められるが、鍛造剝片は観察できない。16・17は２段目、18は３段目の桶組みに使用した板材である。いずれもスギもしくはヒノキの板目材である。端面は面取りが行われ、工具痕が全体に残る。断面は内面に僅かに弧を描く。19・20は土留め状構造物内に打ち込まれた杭である。芯持ち材で下端部を切り落として杭とする。21・22は同一個体の可能性もある。スギの板目材で、22は斜方向、21は平行及び斜方向に刃物痕跡が残る。

２）掘立柱建物（SB）

SB 011（第９図）

調査区北側で確認する。主軸方位をＮ－９°－Ｅにとる２間×２間の総柱建物である。柱穴掘り方は東列が長円形で他はほぼ円形を呈する。柱穴には径25～30cmの柱穴が残る。建物位置には東側を中心に不整な掘り込みを行い、再度埋め戻して整地を行っている。整地埋土は上層が灰褐色土、下層が地山土に近い黄白色土が主体となっている。またSB011の東側に沿って掘削され、北側は建物に沿って折れ曲がる溝－SD009－も建物と一連の遺構と考えられる。方向的に見ると谷を隔てたSD006もSD009と一体の溝である可能性が高い。これらの溝が雨水よけ等の機能を有しながら建物を区画するものと考えられる。出土遺物から小田編年Ⅳ～Ⅴ期に位置付けられる。




1．黒褐色土
2．黄褐色砂質土（粗砂、小礫を含む）
3．黒色土
4．粗砂
5．暗褐色土
6．粗砂
7．暗褐色土
8．暗茶褐色砂質土
9．黒褐色砂質土
10．暗褐色土
11．黒褐色砂質土（粗砂が多い）
12．粗砂
13．茶褐色砂質土
14．12層にやや黒味がある
15．黒褐色土 ｝類似
16．黒色土 ｝
17．黒灰色土
18．暗褐色土
19．黒色土に粗砂が多く入る
20．黒色土（粘性があって、土器を含む）
（---以上で一部、古墳後期の可能性あり）
21．黒色土に粗砂を多く含む
22．黒色土（20層より更に黒く粘性が強い）
23．黒灰色土（粘性が強い）
24．淡黒灰色砂質土（小礫を多く含む）
25．24層より淡い（小礫を多く含む）
26．暗灰色粘質土
27．淡黒灰色砂質土に地山のブロックを多く含む
28．暗灰褐色粘質土（きめ細かく粘性が強い）
29．27層に同じ
30．24層に同じ
31．28層にほぼ同じやや暗い
32．28、31層よりやや暗い
33．黒褐色粘質土
34．黒色粘質土
35．暗灰色砂質土
36．灰色砂質土（粗砂が多い）
37．35層に同じ
38．灰色粗砂および砂質土
39．黒褐色土に地山がブロック状に混合

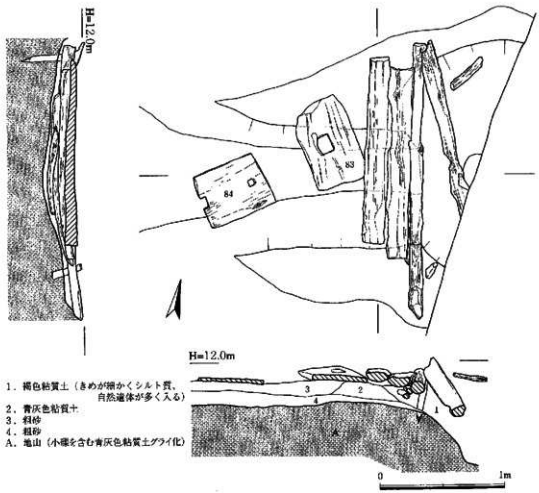
第11図　SD002東壁土層図（1/60）

写真13　SD002（西から）

写真14　SD002東端土層

出土遺物（第10図）　23～30は柱穴出土、31・32は整地層出土でいずれも須恵器である。

23～29はSP014で、26は掘り方、他は柱痕出土である。23・24は坏蓋である。25～27は坏身である。27の外底面には回転ヘラ削りが見られる。立ち上がりは短く内傾している。28は甕の口縁部である。叩き及び当て具痕が残る。29は鉄滓である。気孔・木炭痕が比較的小さく、鍛冶滓と考えられる。30はSP015出土のつまみを有する蓋である。31は坏蓋である。天井部外面1/2に回転ヘラ削りを行う。32は高坏脚裾である。




第12図　SD002東端遺物出土状況実測図（1/3）

3）溝（SD）

SD 002（第11・12図）

調査区中央で検出し、やや蛇行しながら東西方向に流れる溝である。溝は斜面に開析された谷部のほぼ中央部分に掘削されている（第4図）。特に調査区東側端の谷幅が狭い部分では自然の鞍部を利用し更に掘削を行ったものと考えられる。溝幅は丘陵高所の東側では実際の掘削幅は3.4mであるが、自然の谷部分も取り込んでおり、見かけ上は幅7m、深さ2m強となる。西端では幅1～1.6m、検出面からの深さ40cmである。溝底は標高11.6m前後でほぼ水平に近い。堆積土は大きく3層に分けることができる。まず最上層の1～19層は第4図谷部堆積土の1～14層に相当する。溝埋没後谷を埋める土砂である。粗砂層がランダムに混入した自然堆積土である。出土遺物には白磁・瓦器があり中世前半までの埋没と考えられる。中層の20～23層は一部流水による粗砂が混入するが基本的に粘性の強い黒色土によって構成されている。溝埋没後に滞水状態が想定できる埋土である。20層の上面付近から須恵器が出土するが、以下からは古墳時代前期の土師器が出土する。最下層24～39層が溝の埋没土である。弥生時代中期後半の遺物が多く出土する。

また溝東端部には溝底部に井堰状の施設が作られる。井堰は溝底の南北両端部に1本ずつ杭を打ち込み、その西側に長さ1.5～2m前後の丸太材と半割材等6本を並べて作っている。この際杭の四側

写真15　SD002東端遺物出土状況（南から）

写真16　SD002東端遺物出土状況（北西から）

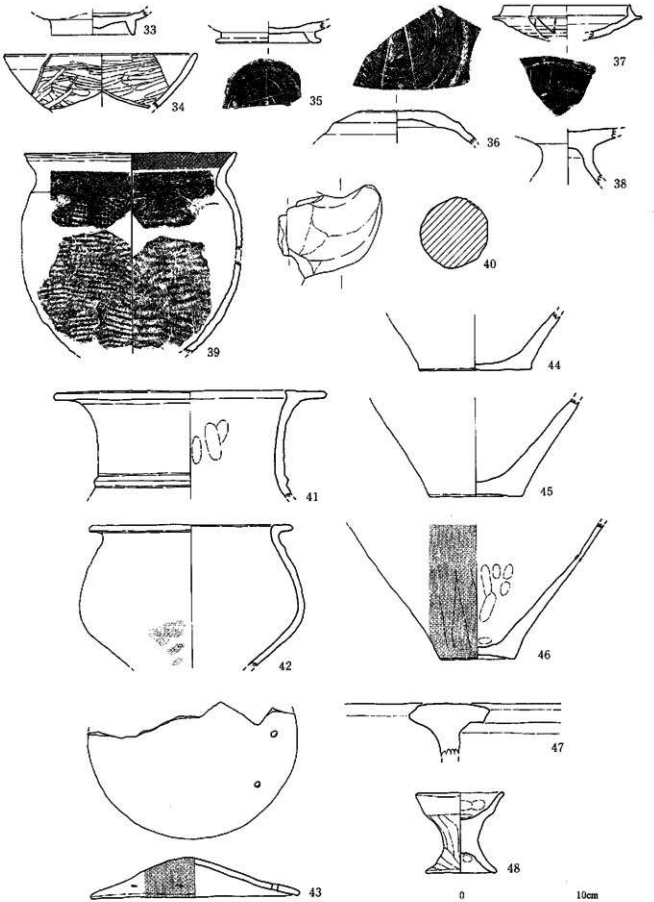
写真17　SD002東端遺物出土状況（西から）

写真18　SD002東端完掘後（北から）

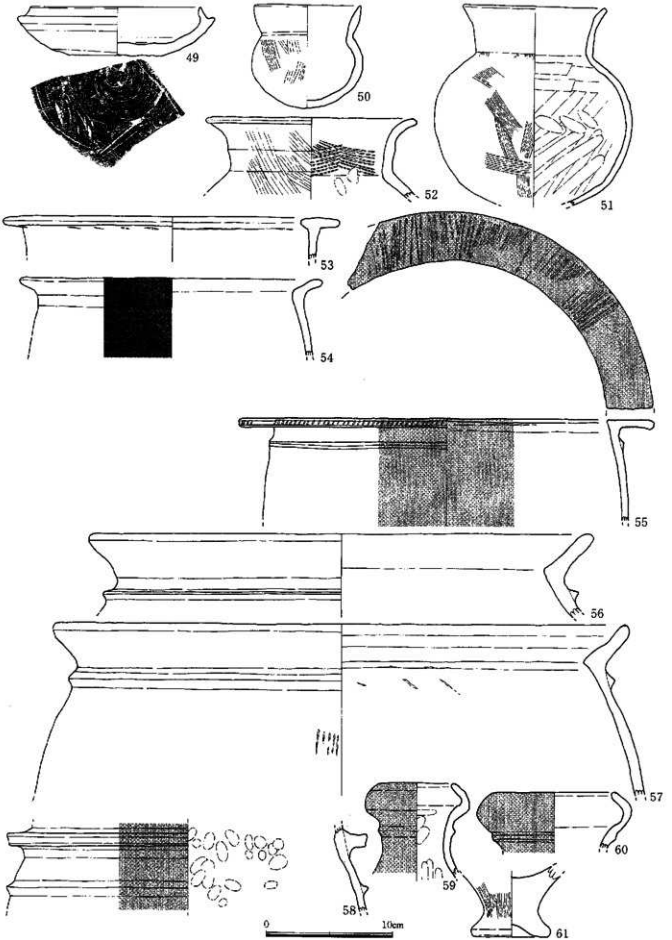
には20cm程の厚さで盛土（第12図２～４層）が行われ、丸太の一部もこの上面に載っている。また井堰西側には盛土の上面にねずみ返し等の板材が２個出土している。使用木材には建築材の転用も行われているものと考えられる。更に井堰の東側には流水方向とは逆に東側に急激に深くなっている。土層図28・32～34・39層にはヘドロ状の埋土中から自然の植物遺存体が大量に出土している。調査地点の東側は現代まで墓所として使用されていたため、遺構の確認はできていないが、井堰の上流側には池状のくぼ地が形成されていた可能性も考えられる。また下流の沖積部分に水田が形成されていたことが想定できるが、いずれも確認されたことでなく可能性の指摘にとどめておきたい。

出土遺物（13～18図）　出土遺物の大半は弥生時代中期後半～末の遺物で一部前期・後期の遺物が含まれる。また中期後半代の遺物としては丹塗り土器が一定量を占めている。また前述したように溝埋没後には中層・上層土により谷部全体が中世前半代までに自然埋没していくようである。33～48は上層出土遺物、49～61は中層出土遺物、62～72は下層（溝埋没土）出土遺物である。73～82は埋土全体から出土した遺物である。83・84は井堰西側出土の木器である。

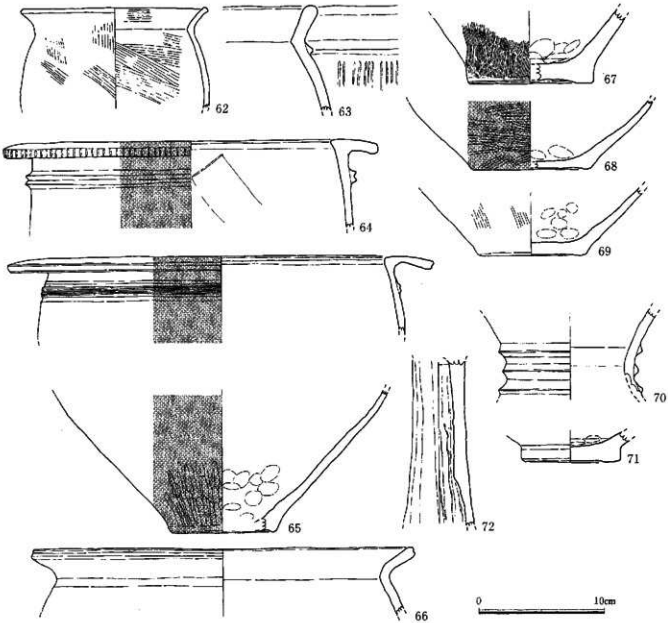
33はＶ類白磁碗の底部である。34は瓦器椀である。35～38は須恵器である。39は土師器甕である。外面に擬格子の叩きを行い、内面には当て具痕が残る。口縁部内面に帯状に煤が付着する。40は土師




第13図　SD002出土遺物実測図１（1/3）




第14図　SD002出土遺物実測図２（1/3）

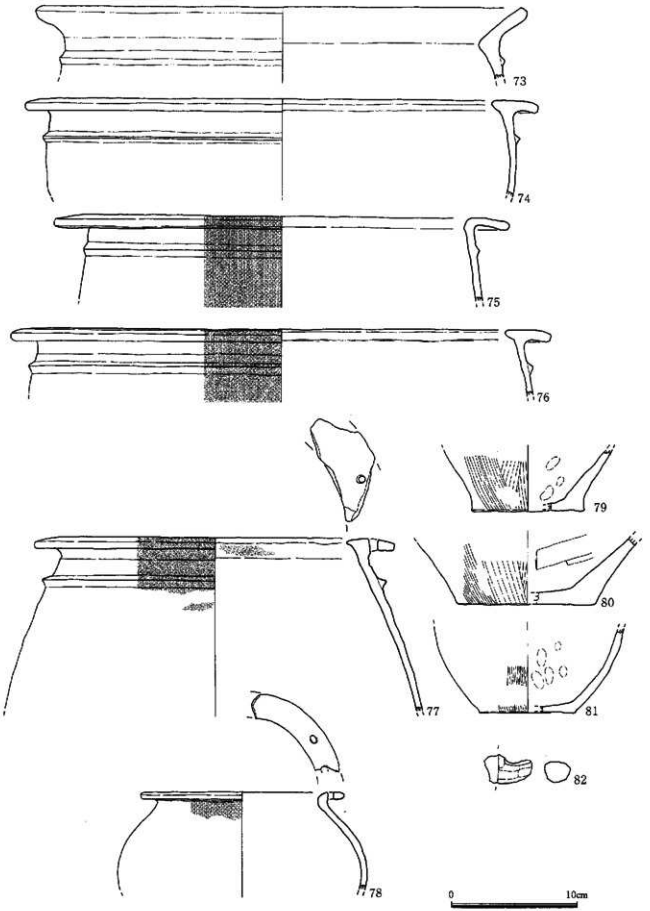



第15図　SD002出土遺物実測図３（1/3）

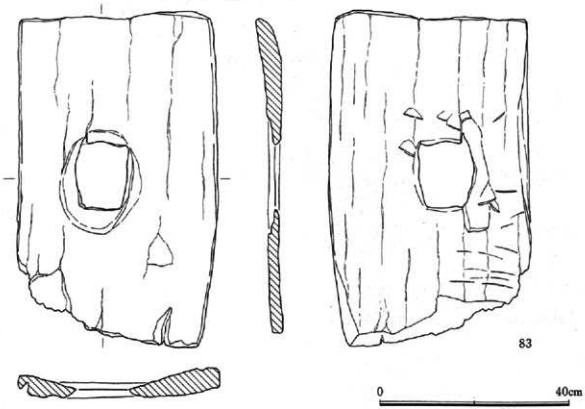
器把手である。41～47は弥生土器である。44・47以外は丹塗り土器であると考えられるが、摩滅が著しく赤色顔料の剥落も著しい。47は甕棺の口縁部破片である。48はミニチュアの高坏である。

49はⅢｂ期の須恵器坏身である。50・51は土師器である。50は小型壺で外面に粗い刷毛目が残る。51は外面刷毛目の後粗い板ナデを行う。内面は上半横方向、下半斜方向のヘラ削りを行う。52は内外面に刷毛目を施す。53～57は甕である。54は外面黒色に塗る。55は丹塗りを行い、口縁部上面には放射状の磨きを施す。56・57は内湾口縁を有する。58は丹塗りを行う甕形土器の破片である。断面台形突帯とその下位の三角突帯が１条残存している。59・60は袋状口縁壺破片である。61は上げ底の甕底部破片である。

62は後期に位置付けられる甕である。内外面に刷毛目を施す。63は内湾口縁を有する。64～66は丹




第16図　SD002出土遺物実測図４（1/3）




第17図　SD002出土遺物実測図５（1/8）

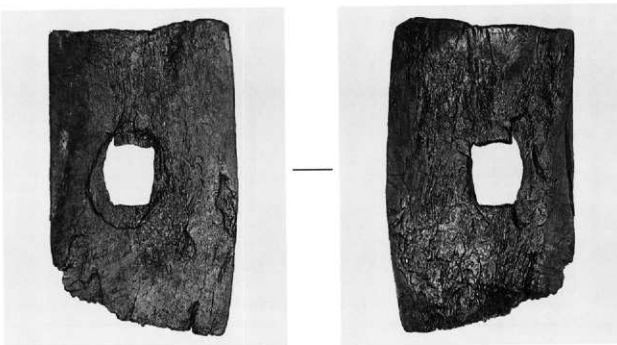
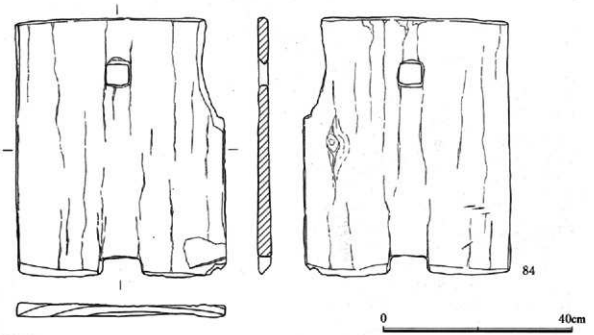


写真19　SD002出土遺物⑧③

塗りの甕である。65の底部破片を除いては器面の剝落が著しい。67～69は底部破片である。68には外面の丹塗りが残存する。70は西部瀬戸内系の壺である。頸部から３条の突帯が巡る。71は縄文晩期に位置付けられる底部であろうか。72は高坏筒部である。




第18図　SD002出土遺物実測図６（1/8）

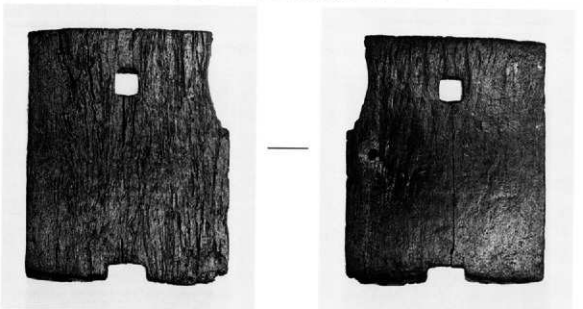
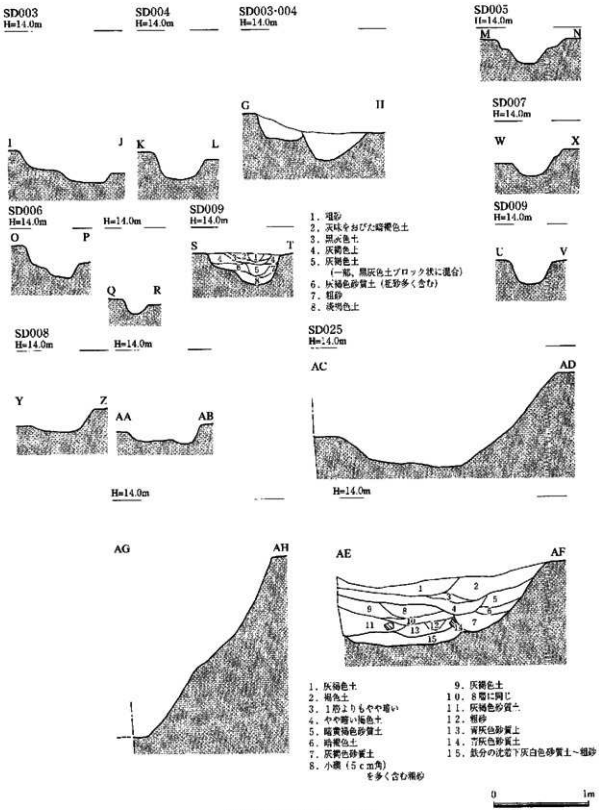


写真20　SD002出土遺物84

73～77は甕、78は鉢である。75～78にはかろうじて赤色顔料が残存している。79～81は外面に刷毛目を施す底部である。82は把手である。

83はねずみ返しである。材質はクリであろうか。木取りは板目である。平面70×42㎝を測り中央部に14×11㎝の方形孔を有する。断面形状は横方向に湾曲している。孔周辺に22×16㎝の楕円形のくぼみが残っており、柱の形状を示しているものと考えられる。84は54×43㎝の有孔板材である。厚みは2.5㎝前後で、断面に湾曲はなく平坦な板材である。広葉樹を材料とし、木取りは板目である。４～５㎝四方の方形孔と端部に凹字状の繰り込みを有する。




第19図　溝断面図（1/40）

SD 003（第19図）

調査区南西側で検出する。開析谷の上部から北側斜面に向かって延びる。長さ5m、幅0.8～1mを測る。溝底も北側に傾斜しており、北側端では溝底標高12.3mである。埋土は小礫混じりの黒褐色

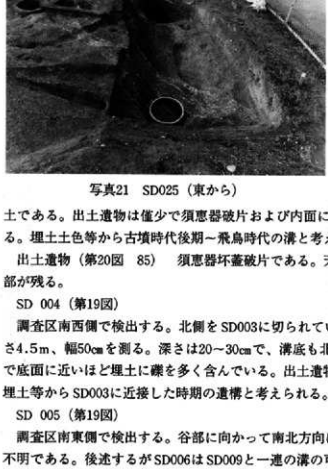


写真21　SD025（東から）

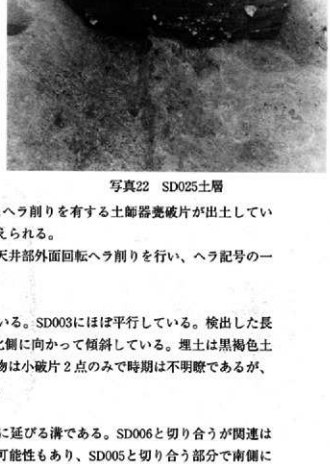


写真22　SD025土層

土である。出土遺物は僅少で須恵器破片および内面にヘラ削りを有する土師器甕破片が出土している。埋土土色等から古墳時代後期～飛鳥時代の溝と考えられる。

出土遺物（第20図　85）　須恵器坏蓋破片である。天井部外面回転ヘラ削りを行い、ヘラ記号の一部が残る。

SD 004（第19図）

調査区南西側で検出する。北側をSD003に切られている。SD003にほぼ平行している。検出した長さ4.5m、幅50cmを測る。深さは20～30cmで、溝底も北側に向かって傾斜している。埋土は黒褐色土で底面に近いほど埋土に礫を多く含んでいる。出土遺物は小破片２点のみで時期は不明瞭であるが、埋土等からSD003に近接した時期の遺構と考えられる。

SD 005（第19図）

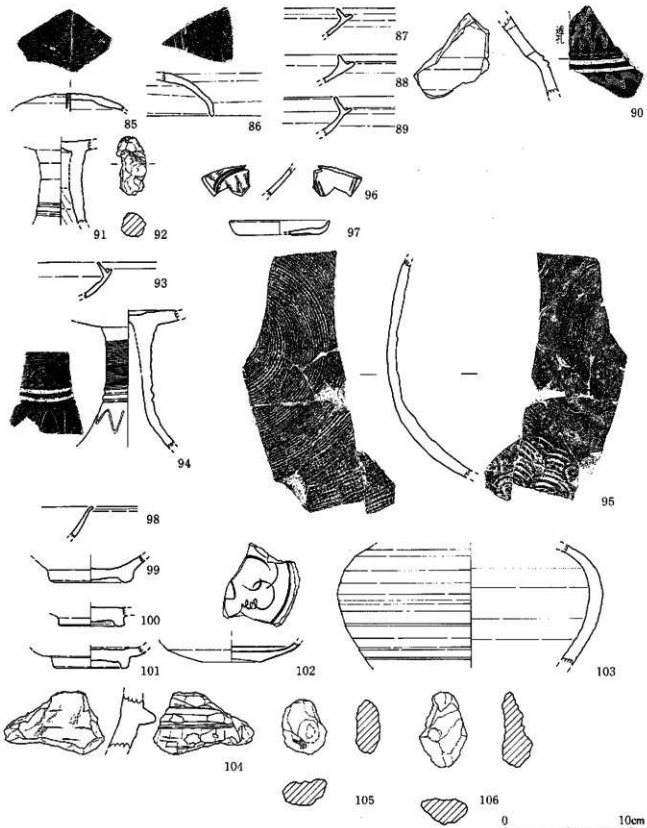
調査区南東側で検出する。谷部に向かって南北方向に延びる溝である。SD006と切り合うが関連は不明である。後述するがSD006はSD009と一連の溝の可能性もあり、SD005と切り合う部分で南側に矩形に折れ曲がる可能性も考えられる。埋土は拳大の礫を含む暗褐色土である。土師器、須恵器小破片が出土する。

出土遺物（第20図　86～90）　図示したものはいずれも須恵器である。86は坏蓋で天井部外面には回転ヘラ削りを行う。87～89は坏身である。立ち上がりは短く内傾する。90は大型器台の脚裾部破片である。２条の突帯を有し、その上下に波状文を有する。三角形の透かし孔が認められる。また下方は上部に比べ焼成軟質となっている。

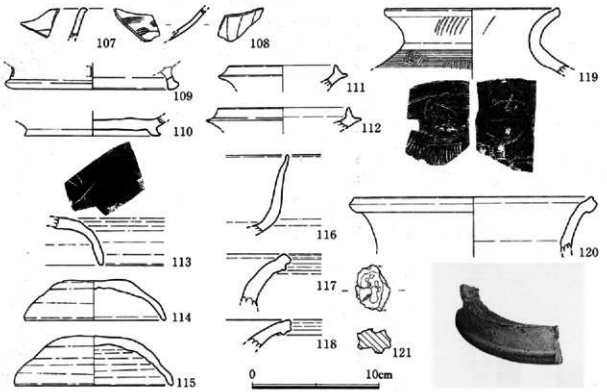
SD 006・009（第19図）

調査区東側で検出する。SD006はほぼ直線的にN－18°－Eの方向で延びる。溝幅30～50cmを測る。埋土は拳大の礫を含む暗褐色土である。SD002土層中の中層（古墳時代前期）を切って掘削されている。なお上層との先後関係は不明である。延伸方向より北側のSD009と一連の溝である可能性が高く、掘立柱建物の項でも述べたようにSB011に伴う溝の可能性も考えられる。SD009のように西側に曲がるものとすれば、SD005との切り合い部分で西側に折れ曲がる可能性もある。土師器、須恵器破片が出土する。

SD009は北側丘陵高所部分で検出する。N－6°－Eの方向で延び、SB011の北側で矩形に屈曲し、SD025に切られている。SB011に伴う整地土を切って掘削されている。溝幅は0.4～1m、深さは




第20図　SD003、005、006、009、025出土遺物実測図（1/3）




第21図　包含層出土遺物実測図（1/3）　　写真23　包含層出土遺物（109）

20～30cmを測る。SD006と一連の溝とすれば埋没途中で緩やかな鞍部となる谷をはさんで南北長18mの区画となる。土師器・須恵器が出土する。

出土遺物（第20図　91～95）　91・92はSD006出土、93～95はSD009出土である。

91は須恵器高坏筒部分である。92は鍋化が著しいが、棒状の鉄製品と考えられる。

93～95は須恵器である。93は坏身である。94は高坏筒部である。しぼり痕が残り、2条の沈線とカキ目が施される。裾部分にはヘラ描きによる波状の施文が行われる。95は横瓶である。前面に同心円状のカキ目が施され、体部には叩き痕跡が残っている。

SD 008（第19図）

調査区北側で検出する。SD025にほぼ平行し、東西に延びる溝である。埋土は茶味を帯びた褐色土である。現状で幅80cm、深さ10cmを測る。出土遺物には外底面糸切りの土師器皿、青磁碗があり、白磁は認められない。SE001との切り合い関係は明らかでないが、出土遺物からはこれに後出するものと考えられる。13世紀代の溝か。

出土遺物（第20図　96・97）　96は同安窯系青磁碗である。97は糸切りを行う土師器皿である。

SD 025（第19図）

調査区北端部分で検出する。調査区境界に平行に南北方向に延びる。溝幅は明らかでないが4m程度にはなるものと考えられる。溝底は東側では標高12.8mであるが、中央付近は井戸状に深くなり底面標高11.5mとなる。埋土には粗砂がレンズ上に堆積している。これらの粗砂は前述の井戸状に深くなる部分が埋没した上部にも堆積しており、全体に流水があったことがわかる。出土遺物には白磁、青磁、石鍋、鍛冶滓がある。SD025は屋敷地を区画する溝の可能性が考えられるが、これに伴う建物等は第5・6次調査でも確認されていない。東側の事業地外に関連施設が存在するのであろうか。時

期は不明瞭であるが98・101遺物より中世後半代を考えておきたい。

出土遺物（第20図　98～106）　98・99は白磁碗である。98は端反りとなる。100・101は青磁碗である。101は高台畳付及び内底面の釉を掻き取っている。露胎部分はにぶい橙色を呈する。102は白磁皿で外底面の釉を掻き取る。103は須恵器壺の胴部破片である。104は鍔の巡る滑石製石鍋である。105・106は椀形鍛冶滓である。鍛造剥片の付着は見られない。

4）その他の遺物（第21図）

遺物はいずれも第4図谷部分包含層1層中より出土したものである。107・108は白磁碗である。109は新羅土器一段透窓高坏の脚部であろうか。低脚で端部を丸く収め、復元すると脚部に4ヶ所の（長）方形透かし孔を有するものと考えられる。110～120は須恵器である。110は高台付きの坏である。111・112は蓋受けを有する坏身、113～115は坏蓋である。114・115は天井部ヘラ切り未調整である。116は椀である。117～120は甕である。121は鍛冶滓である。

5）小結

第5次調査の結果についてここで簡単にまとめておきたい。対象地は丘陵西側斜面部分で、前面の沖積地に至る直前部分であると考えられる。調査区の中央部は開析作用により谷部を形成している。谷部は調査地点の西側で大きく「八」字に開いている。

調査地点で最も古い遺構はSD002である。谷部中央に掘削された流路と考えられる。掘削は弥生時代中期後半であろう。溝自体は比較的短期間で埋没したものと考えられるが、包含層出土遺物・SD002埋没状況等より谷部全体は少なくとも飛鳥時代ごろまでくぼみ状に残り、中世前半代までには完全に埋没したものと考えられる。SD002東端には建築材を転用して井堰が作られている。調査区外になるが東側に溝より深い掘り込みが行われていたものと考えられ、オーバーフローした水を下位に流していたものと考えられる。水田に伴う施設と考えられ、前面の沖積地に該期の水田が形成されていたものと考えられる。沖積部分での弥生時代の生産遺構には不明な点も多く今後注意していく必要がある。またSD002内の出土遺物中から丹塗り土器が多く出土しており、東側丘陵高所に埋葬遺構群が存在している可能性が考えられる。

次いで遺構が確認されるのが古墳時代後期～飛鳥時代である。2間×2間の総柱建物SB011及びこれに伴うと考えられるSD006・009がこれにあたる。溝は建物を区画するものと考えられ東側からの水を避ける機能を有していたものと考えられる。SB011にはこれに伴う整地も認められるが、全体を平坦にするまでには至っていない。斜面上では部分的に均しながら建物を建設したものと考えられる。立花寺遺跡群内ではこれまでの調査でも同時期の総柱建物が見つかっている。全体の状況は明らかでないが、7世紀代に周辺に倉庫群が展開していたものと考えられる。またこの時期には谷部は僅かな敷部を残し特に東側は大半が埋没したと考えられる。

最後に中世の溝（SD025）、井戸（SE001）をあげることができる。SE001は桶組みの井戸で遺存状態が非常に良好である。SD025は屋敷地に伴う遺構の可能性も考えられたが、不明瞭な点が多い。またピットから陶磁器等の出土は見られずこの時期の建物は未確認である。

# Ⅳ　第６次調査の記録

## Ⅰ・Ⅱ区の調査

### １　調査概要

第６次調査はクラブハウス建設部分、倉庫建設部分等の構造物建設部分を中心に、農園部分で遺構の保存を図り難い地点について調査を行った。調査面積はⅠ区150㎡、Ⅱ区110㎡である。

Ⅰ・Ⅱ区は第５次調査北隣の丘陵際平坦部に位置している。Ⅰ区は農園部分の調査である。上部盛土を60～100㎝除去すると黄褐色土の地山が露出する。東側の丘陵寄り部分は本来存在していた丘陵裾を削平して平坦地を造成した模様で、削平が著しく遺構の残存状況はきわめて不良であった。また斜面側にかかる調査区西側では削平が大きく及んでおらず遺構は良好に残存していた。更に西側には丘陵斜面に堆積した包含層が確認されている。包含層上面には中世段階と考えられるピット、古墳時代後期～飛鳥時代にかかる不明竪穴が掘り込まれている。包含層除去後には斜面部分には遺構は確認できなかった。検出遺構は竪穴住居跡、溝、土坑、不明遺構、ピットである。遺構・遺物は古墳時代後期～飛鳥時代のものと中世前半代のものの２者が主体を占め、特に遺物量では前者が大半を占めている。遺構・遺物のこのようなあり方は５次調査にもつながるものである。

Ⅱ区はⅠ区の北東側、丘陵際の平坦部分にあたる。Ⅰ区の遺構残存状況からⅡ区部分では削平が進んでいることが想定された。Ⅱ区は現状で標高13ｍを測り、ほぼ平坦である。遺構面は表土を20㎝ほど除去した直下－標高12.8ｍ前後－で露出するが、調査前にあった家屋の影響で遺構面には撹乱が多く、特に北側は遺構面より更に30～60㎝掘り下げられていた。遺構面はほぼ平坦で傾斜は認められなかった。想定どおり削平が著しく西側でピットが数基確認されたのみである。出土遺物には須恵器坏（第25図122）、土師器把手（同123）がある。Ⅱ区より西側にはⅠ区に見られた遺構・包含層が確認されるものと考えられるが、工事が及ばないため現状での保存としている。

### ２　遺構と遺物

１）竪穴住居跡（SC）

SC 111（第26図）

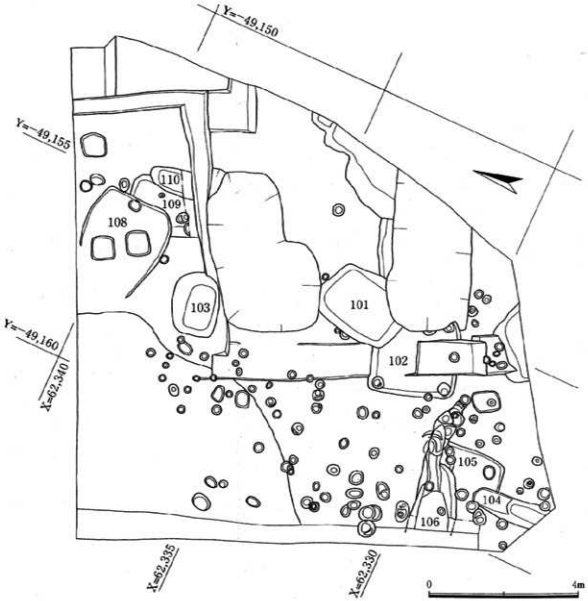
Ⅰ区北西隅で検出する。SD104・106、SX107等に切られる。埋土上層は暗赤褐色土と暗黄褐色土の混合土で自然堆積土とは考え難い埋土である。当初整地土として北側1/3程を完掘した後上層の確認を行った。その結果土層図１・２層除去後に平坦な貼床面が形成されており、そこから炉もしくは竈に伴うと考えられる炭層（３層）が掘り込まれていることが判明した。全体を掘り下げたが、貼床面上面には明瞭な柱穴は認められず竈状の施設も認められなかった。貼床を除去したところでも明確な主柱は認められない。また掘り方底面上で深さ10㎝程の浅皿状の窪み埋土に炭が認められたが住居跡との関連は不明である。土師器・須恵器破片が出土する。

出土遺物（第26図）　124・125は須恵器蓋坏である。共に回転ヘラ削りを行う。126は焼成軟質の土師器甕である。頸部には外面叩き、内面当て具痕がそれぞれ残る。

２）土坑（SK）

SK 101（第27図）

Ⅰ区中央で検出する。切り合い関係からSK102→SK101の関係となる。長軸2.4ｍ、短軸1.8ｍの平面隅丸長方形を呈する土坑である。深さ50㎝で床面はほぼ平坦である。１～８層は掘り直しの様にも

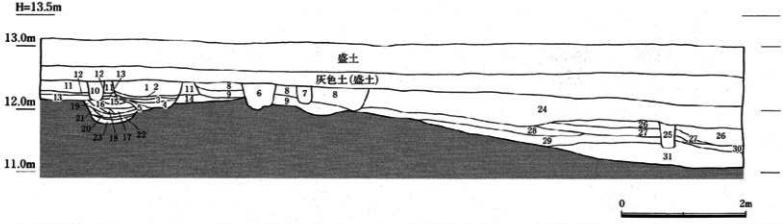



第22図　Ⅰ区上面遺構全体図（1/100）

第23図　Ⅰ区下面遺構全体図（1/100）

写真24　調査区上面全景（西から）

写真25　調査区完掘後全景（西から）

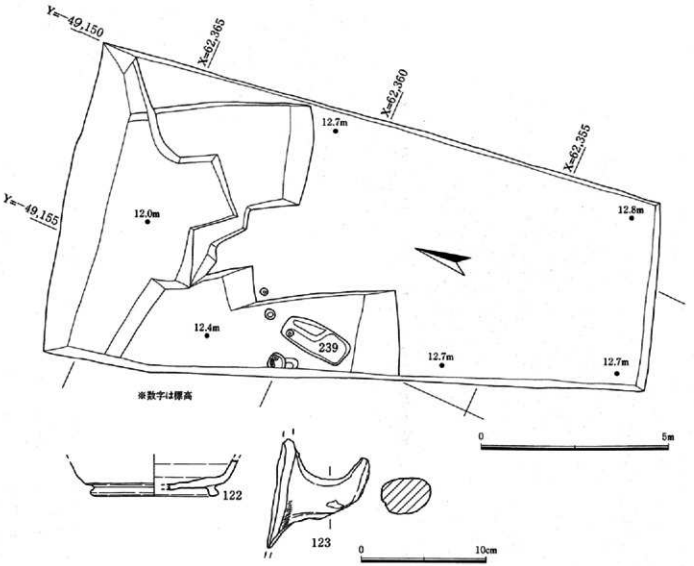



1．灰褐色粗砂～砂質土
2．黒褐色土（炭化物混入）
3．灰褐色粗砂
4．灰色粗砂
5．灰褐色シルト（炭化物・焼土混入）
6．灰褐色砂質土
7．黒褐色土（ピット）
8．黒褐色土（土器を多量に含む）
9．暗黄褐色土に暗赤褐色土がブロック状に混合
10．暗赤褐色土に暗黄褐色土と暗褐色土が少量混合（ピット）
11．暗赤褐色土と暗黄褐色土混合（1：3）
12．暗赤褐色土に灰褐色土少量混合（貼床）
13．褐色土に暗赤褐色土がブロック状に混合（貼床）
14．汚れた黄褐色土（貼床）
15．黄灰色粘質土
16．灰色粘質土
17．淡黒灰色粘質土
18．灰白色砂質土
19．明黄褐色粘質土
20．灰白色粗砂～砂質土
21．19層に同じ
22．灰白色シルト
23．灰色粗砂（底にうすく炭化物が堆積）
24．暗褐色土（土器を多く含む）
25．暗茶褐色土（ピット）
26．粗砂
27．黒味を帯びた暗褐色土
28．24層よりやや暗い
29．にぶい暗赤褐色土
30．黒色土
31．褐色土（遺物はほとんどなく、B区にもみられる弥生の自然堆積層と同じ）

第24図　西壁土層図（1/60）

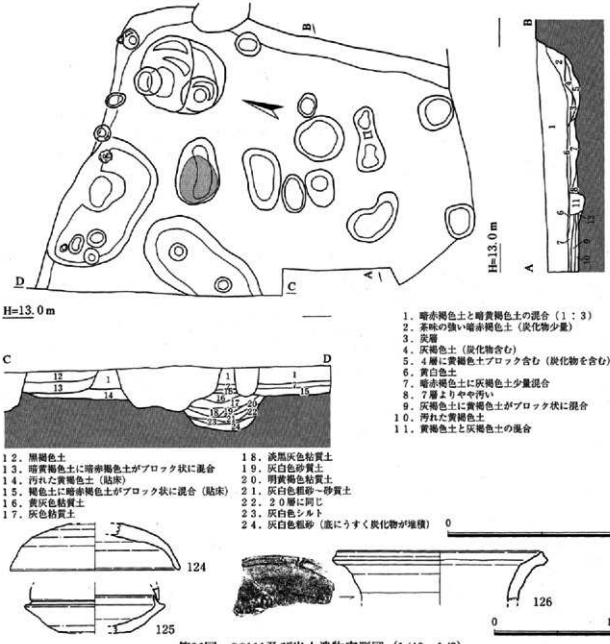
写真26　谷部西壁土層

写真27　西壁南半土層




第25図　Ⅱ区全体図及び出土遺物実測図（1/100、1/3）

写真28　Ⅱ区全景（北から）

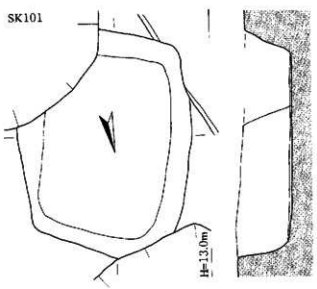


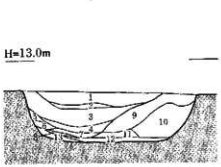

1．暗赤褐色土と暗黄褐色土の混合（1：3）
2．茶味の強い暗赤褐色土（炭化物少量）
3．炭層
4．灰褐色土（炭化物含む）
5．4層に黄褐色土ブロック含む（炭化物を含む）
6．黄白色土
7．暗赤褐色土に灰褐色土少量混合
8．7層よりやや汚い
9．灰褐色土に黄褐色土がブロック状に混合
10．汚れた黄褐色土
11．黄褐色土と灰褐色土の混合
12．黒褐色土
13．暗黄褐色土に暗赤褐色土がブロック状に混合
14．汚れた黄褐色土（貼床）
15．褐色土に暗赤褐色土がブロック状に混合（貼床）
16．黄灰色粘質土
17．灰色粘質土
18．淡黒灰色粘質土
19．灰白色砂質土
20．明黄褐色粘質土
21．灰白色粗砂～砂質土
22．20層に同じ
23．灰白色シルト
24．灰白色粗砂（底にうすく炭化物が堆積）

第26図　SC111及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

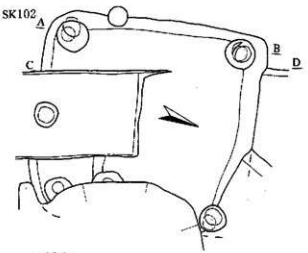
写真29　SC111（西から）

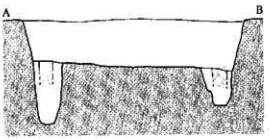
写真30　SC111土層

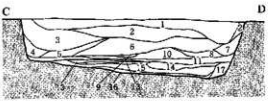



1．暗褐色土に黒色土がブロック状に混合
2．褐色土
3．灰色土に黒色土がブロック状に混合
4．暗茶褐色土
5．茶褐色砂質土
6．5層に灰色砂質土混入
7．暗灰色粘質土（粘性が強い）
8．茶褐色砂質土と灰色砂質土混同（1：1）
9．暗茶褐色土（黄褐色砂質土がブロック状に混合）
10．黄白色砂質土（地山崩落）
11．暗茶褐色砂質土
12．黒色粘質土（粘性が強い）
13．青緑色砂質土（地山崩落）

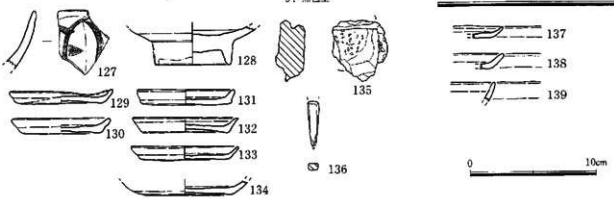



1．褐色土
2．黄灰褐色砂質土
3．暗茶褐色砂質土
（黄褐色砂質土がブロック状に混合）
4．3層よりブロックが少ない
5．灰白色砂質土
6．2層に暗赤褐色土がブロック状に混合
7．暗赤褐色砂質土
8．5層に同じ
9．黒色土
10．暗黄褐色砂質土
11．黒色土
12．10層に同じ
13．黒色土
14．黒色土と暗黄褐色砂質土の混合（3：1）
15．10層に同じ
16．黒色土
17．黄褐色土

0　2m




第27図　SK101、102及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

写真31　SK101（東から）

写真33　SK102（東から）

写真32　SK101土層

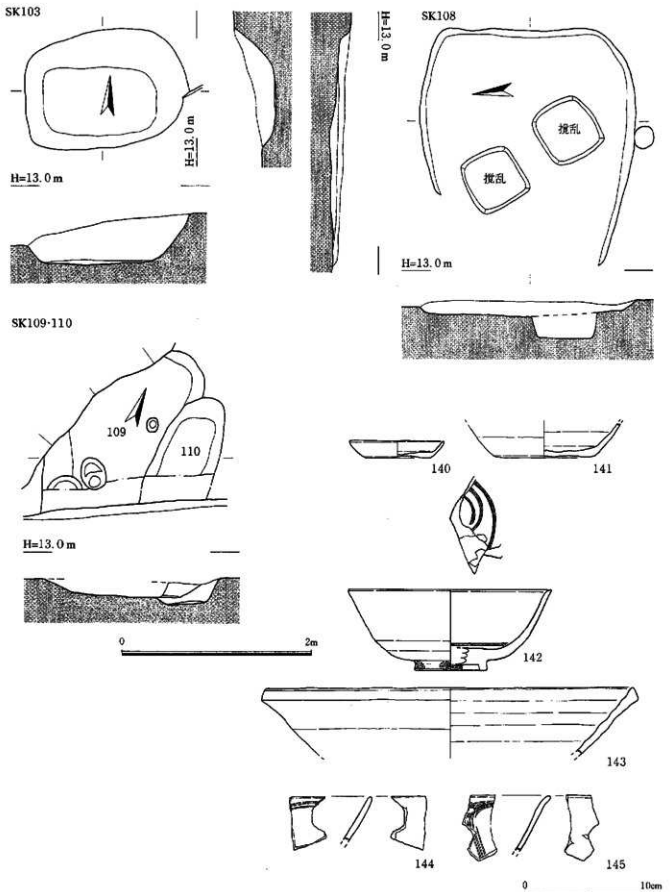
写真34　SK102土層

みえる。また最下層はべたべたした滞水状態を示すような堆積土である。出土遺物の大半は古墳時代後期のものであるが、白磁、青磁、土師器、鍛冶滓が出土しており、13世紀後半に位置付けられる。

出土遺物（第27図　127～136）　127は龍泉窯系青磁碗である。外面に鎬蓮弁が刻まれる。128はV類の白磁碗である。129～134は土師器皿・坏である。いずれも外底面は糸切りを行う。135は椀形鍛冶滓の破片である。中央部は緻密な滓が形成されるが、周辺部分には小気孔が多い。鍛造剝片は認められない。136はやや扁平な鎹状の鉄器である。

SK 102（第27図）

Ⅰ区中央SK101の西側で検出するが主軸方位は異なる。切り合い関係からSK102→SK101となる。トレンチ・撹乱で不明瞭な部分もあるが一辺2.2～2.4mの平面隅丸方形を呈する土坑である。深さ60cmで床面北側がやや低くなる。四隅にそれぞれ柱穴があり径15cm程の柱痕も確認できる。埋土は11層以下黒色土と地山土の互層状態となる。11層上面が最終の使用時床面と考えられる。出土遺物はSK101同様に古墳時代後期のものが大半を占めるが、瓦器、土師器の小破片がわずかに出土している。時期を示す遺物が少量で時期の詳細は不明瞭である。ここでは中世前半代で考えておきたい。




第28図　SK103、108、109、110及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

出土遺物（第27図　137～139）　137・138は土師器皿小破片である。摩滅が進むが外底面は糸切りであろう。139は瓦器椀の口縁部小破片である。

SK 103（第28図）

Ⅰ区北側で検出する。長軸1.7m、短軸1.25m、検出面からの深さ55cmを測る。平面隅丸長方形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は粘性の強い灰色粘質土である。当初攪乱の可能性も考えたが、出土遺物より中世に位置付けられる遺構と考えられる。小破片のみで土師器坏・皿が出土する。陶磁器類は出土していない。

出土遺物（第28図　140・141）　140は土師器皿、141は土師器坏である。摩滅が進み不明瞭であるが、共に外底面は糸切りであろう。

SK 108（第28図）

Ⅰ区北側、包含層上面で検出する。西側壁は不明瞭であるがおおよそ2.4～2.6m四方の隅丸方形を呈する土坑である。検出面からの深さは15cm程で、底面には緩やかな凹凸を有する。埋土上層は褐色土、底面から3cm程はべたべたした黒褐色土である。出土遺物は青磁、土師器、須恵質土器がある。出土遺物、埋土等よりSK101・102と同様の用途を有する上坑の上部が削平されたのもと考えられる。出土遺物は少量であるが現状の遺物構成から、SK101に先行する12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

出土遺物（第28図　142・143）　142は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－1類である。高台外面まで施釉される。143は須恵質の鉢である。口縁端部は玉縁に成形する。

SK 109・110（第28図）

Ⅰ区北側で検出する。南側を攪乱により失い、西側も包含層の掘り下げを行ったため形状は不明確である。埋土は共に地山土に暗褐色土が混合したもので、109と110の切り合いは不明である。110とした方は溝状で幅70cm、深さ30cm程である。109は幅1.6m、深さ20cmを測る。一連の掘り込みの可能性も考えられる。出土遺物は少量で共に青磁、土師器小破片が見られる。

出土遺物（第28図　144・145）　共に110部分からの出土である。いずれも龍泉窯系青磁碗である。Ⅰ－4類であろうか。

3）溝（SD）

SD 104（第29図）

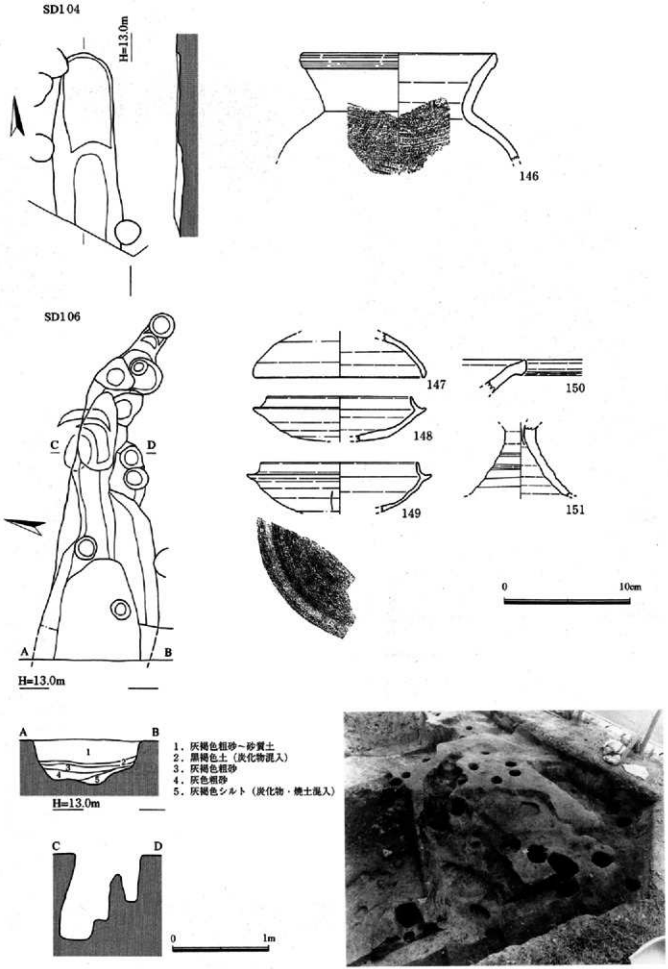
調査区北西隅で検出する。SC111を切る遺構である。南側は調査区外に延びている。幅70cmで南側が一段深くなる。埋土は暗褐色土である。出土遺物は土師器、須恵器の小破片である。

出土遺物（第29図　146）　146は叩き痕を有する土師器甕である。口縁端部は玉縁状に成形する。胴部外面擬格子叩きの後、カキメ状の横ナデを行う。内面には平行当て具痕が残る。

SD 106（第29図）

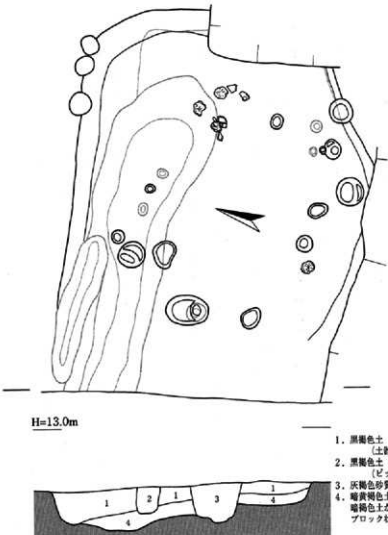
調査区北西隅で確認する。SC111を切る溝である。溝形状は東半で特に不規則でピット状の掘り込みの集合となっている。掘り込みは深い部分では1m近くになっている。西端部分では幅1.1m、深さ50cmとなり、粗砂が多く堆積し、流水の状況を示している。土師器、須恵器が出土している。古墳時代後期～飛鳥時代に位置付けられる。

出土遺物（第29図　147～151）　いずれも須恵器である。147は天井部に回転ヘラ削りを行う坏蓋である。148・149は外底面回転ヘラ削りを行う坏身である。149にはヘラ記号が認められる。150は口縁部を玉縁に仕上げる甕である。151は小型高坏脚部である。




第29図　SD104、106及び出土遺物実測図
(1/40、1/3)

写真35　SD106（西から）




第30図　SX107実測図（1/40）

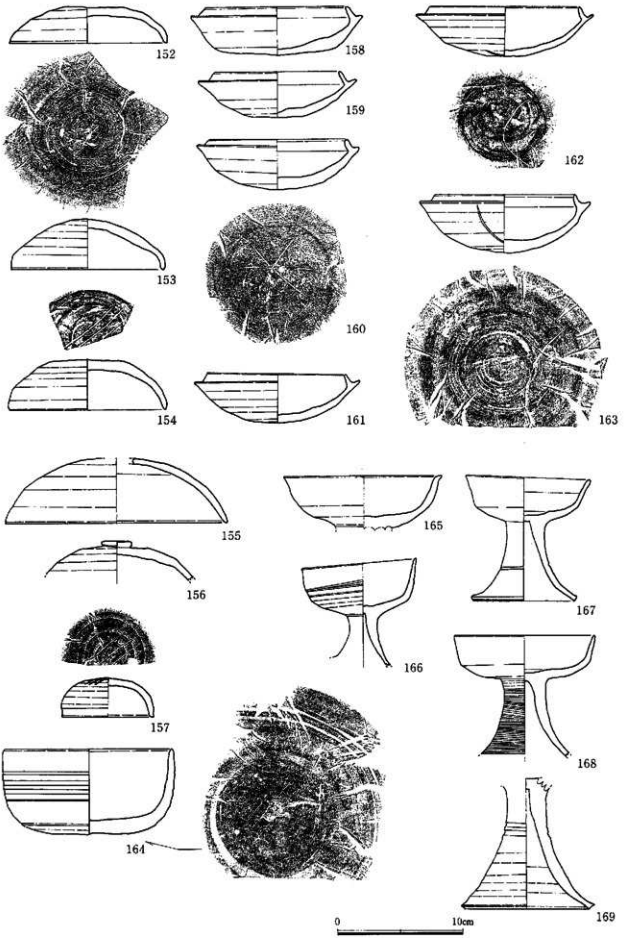
写真36　SX107（西から）

4）不明遺構（SX）

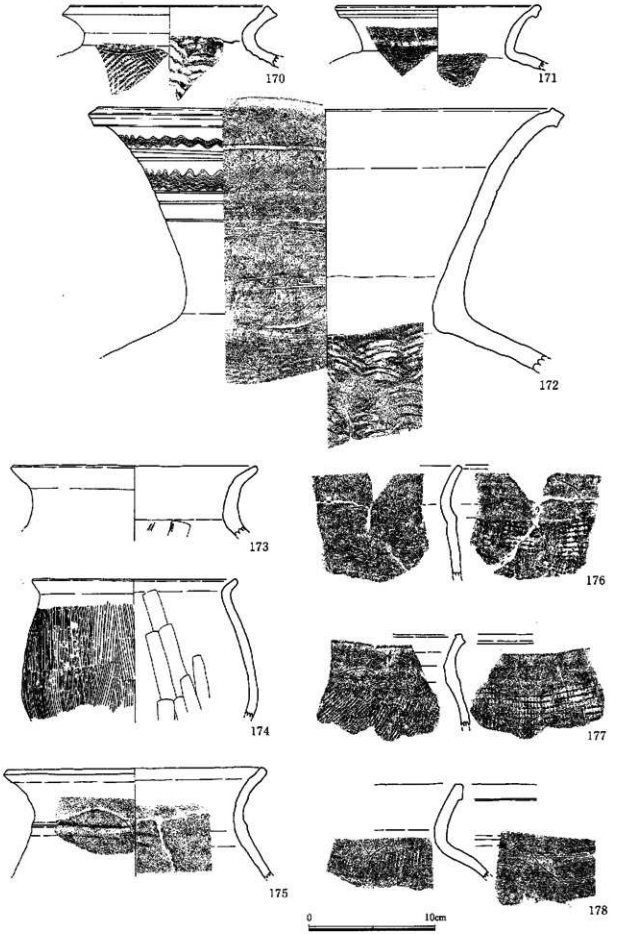
SX 107（第30図）

調査区西側で検出する。当初略方形を呈する竪穴住居と考えて掘り下げを行ったが、プランが不明瞭で主柱穴も認められなかった。埋土上層は遺物を多量に含む黒褐色土で、下層は暗黄褐色土と暗赤褐色土の混合土である。下層埋土は遺物が少なく人為的な埋め土と考えられるが、遺構の性格は判然としない。また上層埋土中の多量の遺物は窪みに投棄されたようなまとまりを示している。遺物はコンテナ16箱分出土している。土師器、須恵器の他弥生時代の丹塗り土器も含まれており、時期的には小田編年Ⅳ期に位置付けられる。またここで注目されるのは上層出土の印花文土器である。一般的にこの時期の印花文土器は古墳の副葬遺物として出土する例が知られているが、ここで出土したのは印花文２式とされる多弁花文を施したものである。須恵器と印花文土器との関係を考える上で良好な資料となり得るものであろう。

出土遺物（第31～33図）　152～172は須恵器である。152～154は天井部1/2～1/3に回転ヘラ削りを行う蓋坏である。155は径17cmを測る蓋である。つまみは無く、外面の3/4に回転ヘラ削りを行う。口縁部は屈曲がほとんど無く開きながら収めている。胎土は比較的精良で微砂粒が少量含まれるのみである。焼成は堅緻である。156はつまみを有する蓋である。外面には回転ヘラ削りを行う。157は蓋である。154と同様のヘラ記号を有する。158～163は坏身である。155は焼成不良で、外面は切り離し部分のみヘラ切りを行う。159～163は外底面回転ヘラ削りを行う。162と163は弧状の同じヘラ記号を有する。164は椀である。中位に３条の沈線を施す。外底面はヘラ切り離しの後、中央部分に手持ちのヘラ削りを行う。ヘラ記号は154・157と同様である。165～169は高坏である。165は口縁端部




第31図　SX107出土遺物実測図１（1/3）




第32図　SX107出土遺物実測図２（1/3）

179

180

181

182

還元帯

酸化帯

185

先端ガラス化
溶融

183

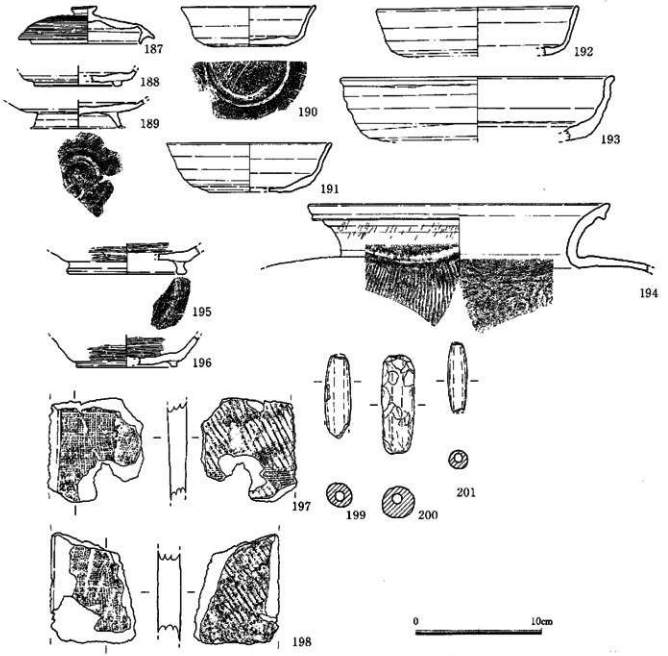
186

184

0 10cm

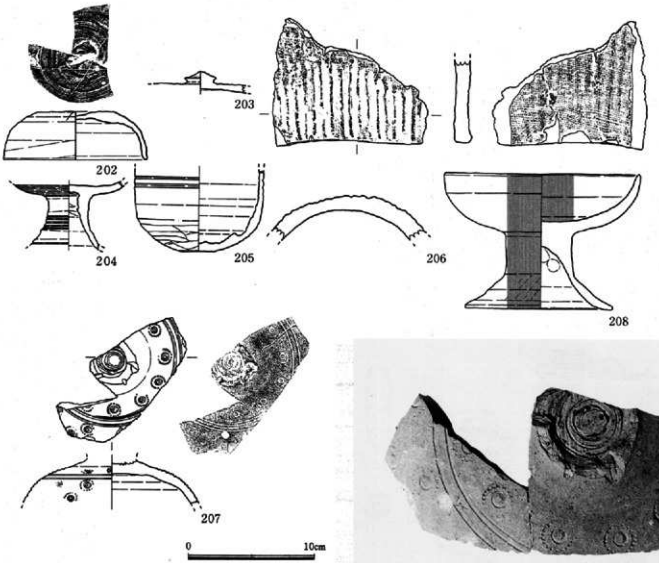
第33図　SX107出土遺物実測図３（1/3）

写真37　SX107出土遺物（184）




第34図　包含層出土遺物実測図１（1/3）

を外方に引き出す。170・171は甕である。外面擬格子の叩きを行う。172は大甕である。口縁端部は外方にコ字状に引き出す。頸部外面に沈線を施し、その間に波状文を充填する。胴部は外面平行叩きを行い、内面には青海波文が残る。173～183は土師器である。173～180は甕である。173は内面縦方向のヘラ削りを行う。175～180は叩きを有する甕である。いずれも内面には当て具痕が残る。175・179は成形後に胴部外面にカキ目を施す。181は焼成堅緻な高坏である。坏部下半にはカキ目が残る。182は椀である。外面上半は横ナデ、下半はヘラ削りを行う。内面は暗文状のヘラ磨きを行う。183は甑である。184は新羅印花文土器の蓋である。外面に２条１組の沈線が３組巡り天井部に多弁花文がスタンプされる。施文位置が異なるが形態的には第35図207の印花文土器に類似するものであろう。




第35図　包含層出土遺物実測図２（1/3）

写真38　包含層出土遺物（207）

185は羽口先端部分破片である。孔の上部から溶融したガラス質滓が滴下している。186は方柱状の砂岩製砥石である。

５）包含層出土遺物（第34・35図）

概要でも述べたように調査地点西側には丘陵斜面上に堆積する包含層が形成されている。またその東側でSK108周辺部分にも暗褐色～黒褐色土の遺物包含層が確認できた。調査時には一連の包含層として捉えていたが、遺物整理の段階でそれぞれの出土遺物に時期差が存在することが明らかになった。便宜的に報告では前者を包含層１、後者を包含層２として遺物を報告する。遺物組成の違いが堆積時期の違いを表すものか、もしくは包含層２が何らかの遺構の一部と考えられるかは不明である。

187～201は包含層２出土である。187～194は須恵器である。187はつまみ付の壺である。かえりを有し、天井部外面にはカキ目を施す。188～189は高台付坏である。190・191は無高台の坏である。外底面はヘラ切り未調整である。192・193は皿である。194は甕である。胴部外面に平行叩きを行う。

195・196は内外面に磨きを行う土師器の高台付坏である。197・198は平瓦である。共に凸面に擬格子の叩き、凹面に布目と紐痕を残す。199～201は土錘である。包含層２は小田編年のⅥ～Ⅶ期の遺物が出土する。

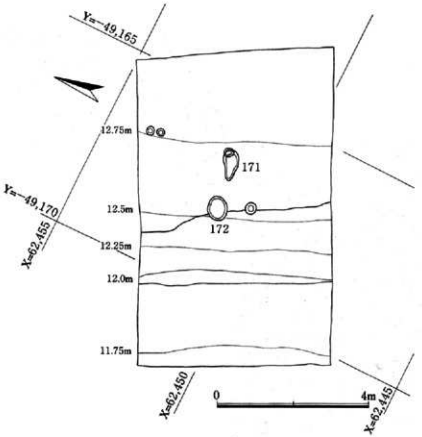
202～208は包含層１出土である。202～207は第22図包含層24～30層出土、208は31層出土である。202～205は須恵器である。202・203は坏蓋である。203はつまみを有する。204は高坏である。205は椀である。胴部に沈線を巡らせ、外底面は手持ちのヘラ削りを行う。206は須恵質の平瓦である。凸面に叩き痕、凹面に布目・紐痕が残る。207は新羅印花文土器の蓋である。つまみ部分を欠失するが、痕跡から３方に透し孔が存在した可能性が考えられる。外面には２条の沈線をはさんで、多弁花文がスタンプされる。208は丹塗りの高坏である。剝落・摩滅が著しいが筒部内面を除いて全面に赤色顔料が塗布される。

## Ⅲ区の調査

### １　調査概要

Ⅲ区は事業地北東部部分の丘陵西側斜面部にあたり、クラブハウス建設部分を調査対象範囲としている（第３図参照）。この丘陵斜面西側部分には全面に遺構が存在しているが、その他の部分については造成を伴わないため現状保存の区域としている。調査は廃土処理の必要から南側2/3の調査を行った後に土砂を反転して北側の残地部分を調査した。最初の南側2/3部分をⅢａ区、北側1/3をⅢｂ区、そして遺構の広がりを確認するため部分的な調査を行った西側沖積地部分をⅢｃ区と呼称して報告しておきたい。調査面積はⅢ区全体で580㎡である。

Ⅲａ・Ⅲｂ区は丘陵緩斜面上に立地している。調査以前は宅地化されており、丘陵低位部を中心に１ｍ以上の盛土が行われていた。Ⅲａ区の南側半分は東半で丘陵地山の黄褐色上が露出し、斜面西側には包含層が形成されており、包含層上では第43図十層Ａの20・21層上面、土層Ｂの９・15層上面で遺構を確認している。その後この部分では包含層を除去しながら下面遺構の確認を行ったが、検出遺構はいずれも当初の遺構面から掘削されたものであり、下層（土層Ａ22層、土層Ｂ15～20層）から掘り込まれた遺構は認められなかった。またこの部分は遺物の出土が少量で、堆積状況等から弥生時代中期～古墳時代前期の自然堆積土層と考えられる。またⅢａ区北側半分～Ⅲｂ区にかけては丘陵斜面上に谷部が開析されており、その上面に中世までの包含層が形成されている。Ⅲａ区では調査上の不手際で包含層中の遺構が不明確なまま掘り下げた部分が多く、その堆積時期等が不明なままであったが、Ⅲｂ区の調査時には谷部上部から遺構面を確認しながら掘り下げを行った。その結果Ⅲｂ区では地山面迄で６面の遺構面を設定して調査を行っているが、堆積土層の変化を必ずしも明確に捉えきれていない部分も多い。また各面で上面遺構の掘り残しも同時に拾い上げているため、必ずしも同時期の遺構群を平面的に捉えることができておらず、遺物の混入も多く見られる。簡単に各面の概要を記すと、１面は鍛冶関連遺構の確認面で捉えている。２面はⅢａ区谷部上面にほぼ相当する。掘立柱建物を確認している。３面は西側では20㎝程下がった茶褐色土上面で抑えるが、東側丘陵高所部では地山が露出する。井戸・土坑・溝・ピット等を検出する。４面以降は谷部の堆積土が存在する部分のみの調査となる。４～６面の検出遺構はピットが大半である。４面は40～50㎝下がった黒褐色上上面である。またこの層は古墳時代後期の包含層となっている。掘立柱建物を確認するがこれは３面からの掘り込みである。５面は４面から20㎝程掘り下げ途中でピットを確認したため遺構面として設定した。６面は地山面であるが谷部の傾斜部分ではこの面から掘り込む遺構は認められず上面遺構の掘り




第36図　Ⅲｂ区１面全体図（1/100）

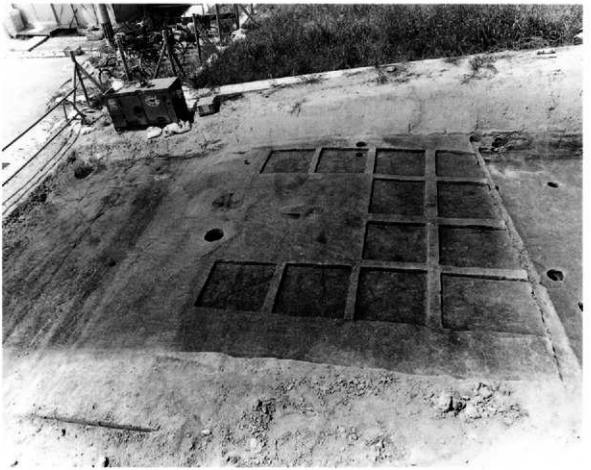
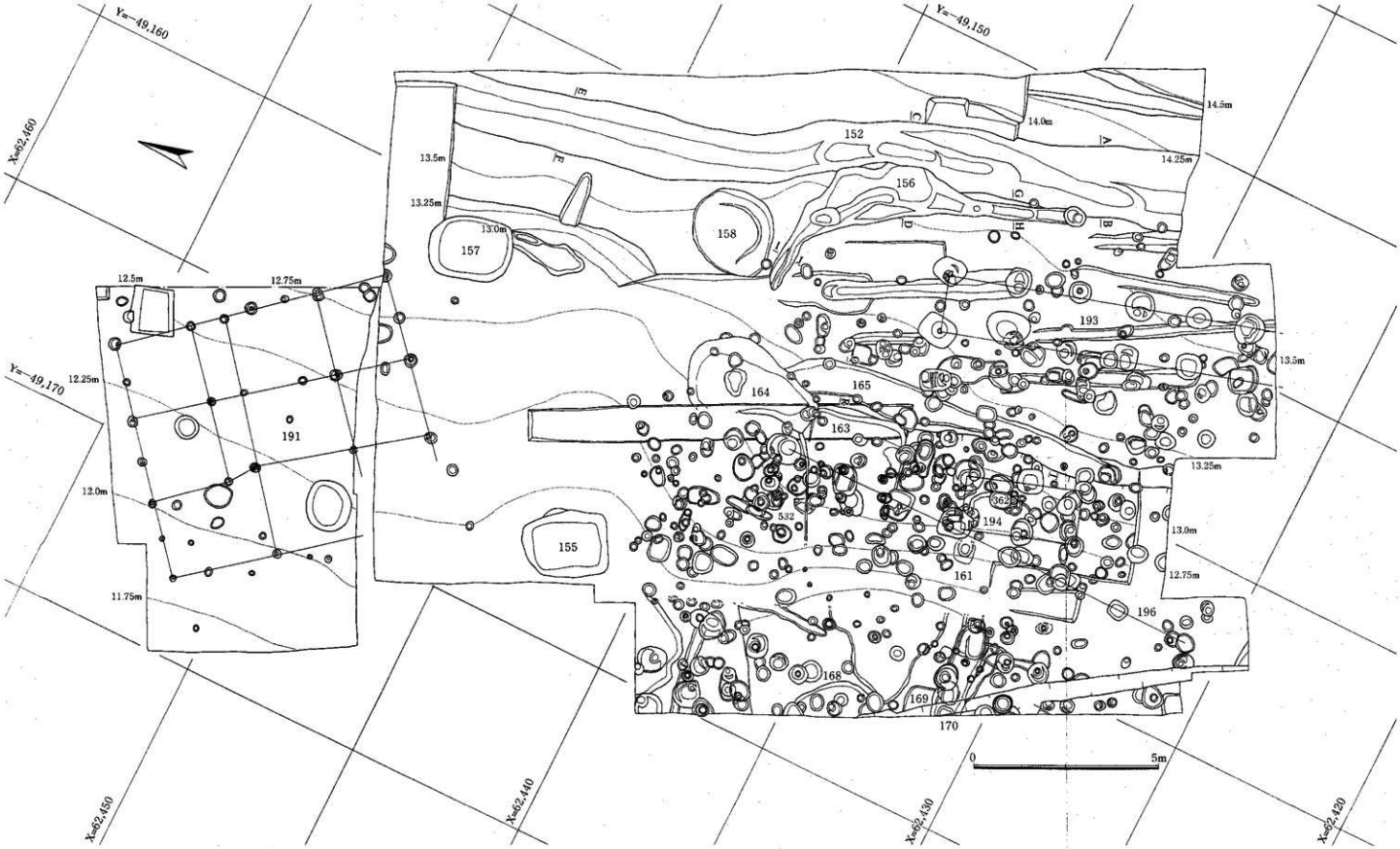


写真39　Ⅲｂ区１面全景（南から）




第37図　Ⅲa区上面及びⅢb区2面全体図（1/100）

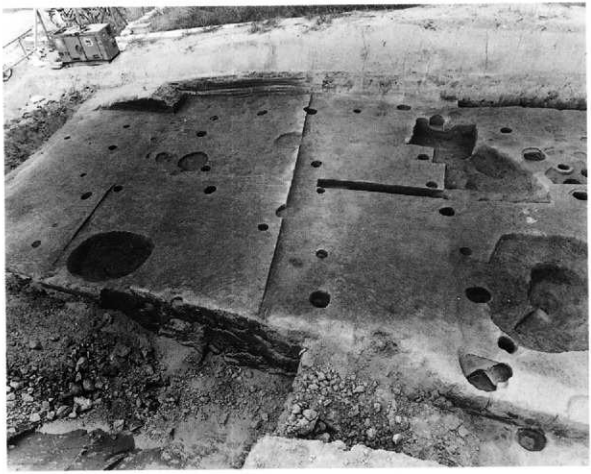


写真40　Ⅲb区2面全景（南から）

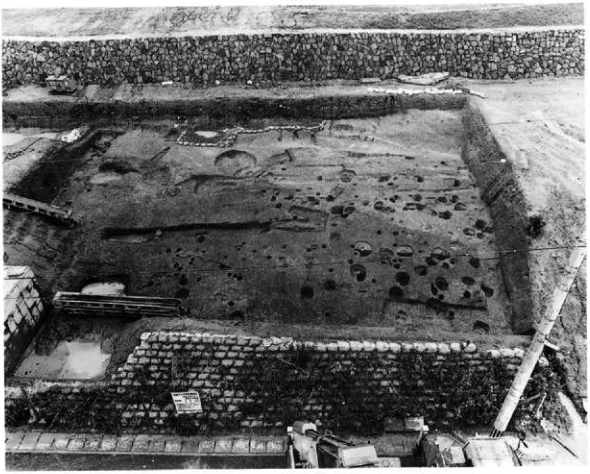
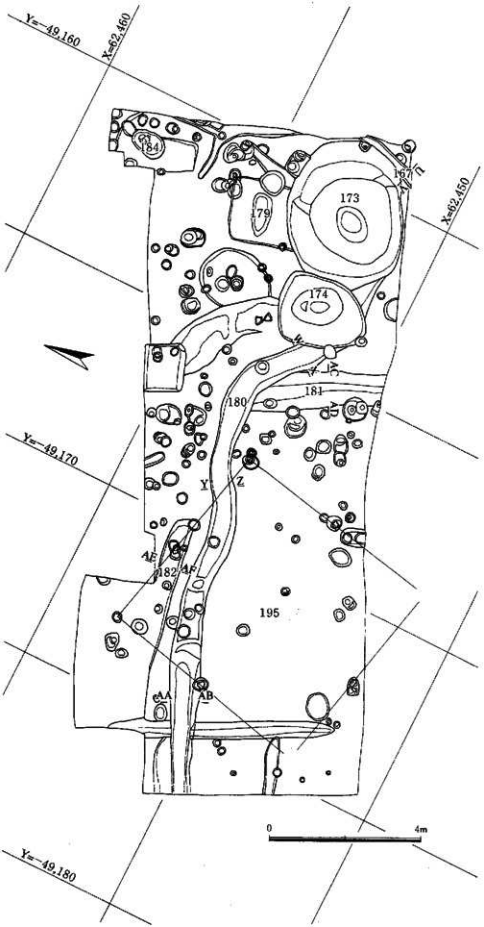
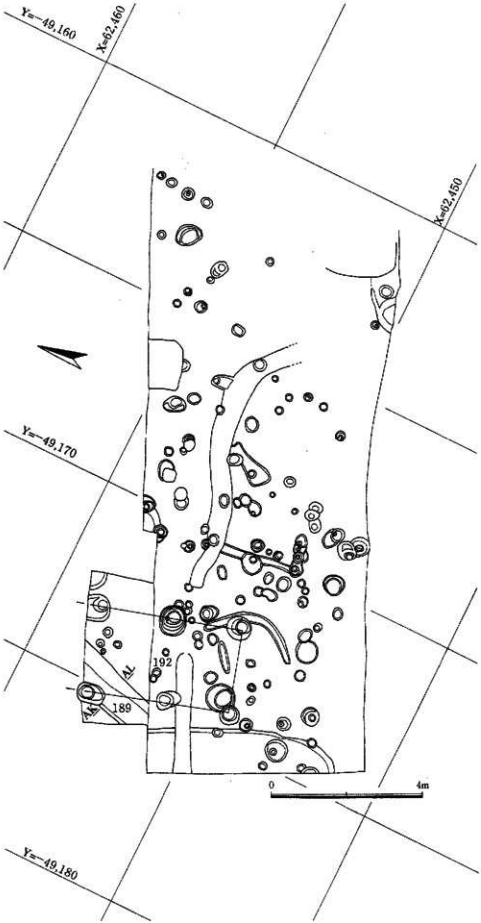


写真41　Ⅲa区上面全景（西から）



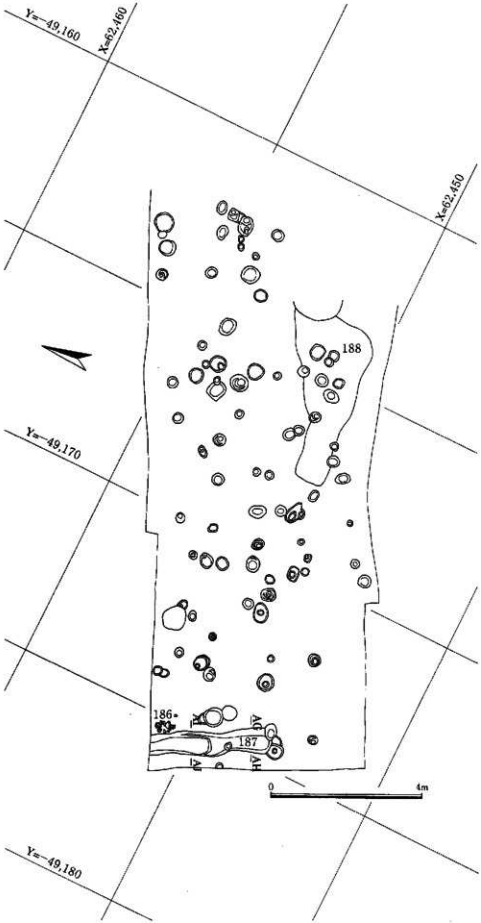

第38図　Ⅲb区3面全体図（1/100）




第39図　Ⅲb区4面全体図（1/100）

写真42　Ⅲb区3面全景
（西から）

写真43　Ⅲb区4面全景
（西から）



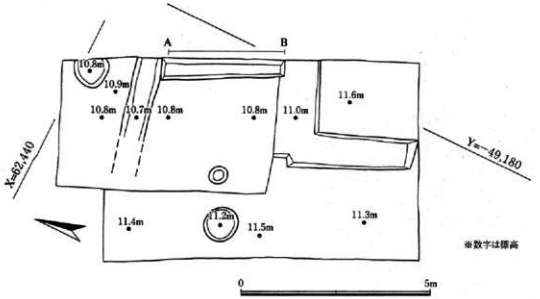

第40図　Ⅲb区5面全体図（1/100）

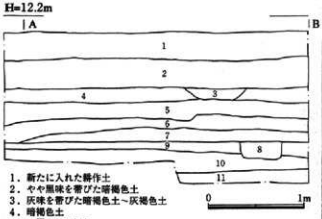
写真44　Ⅲａ区下面全景（西から）

写真45　Ⅲｂ区６面全景（西から）

写真46　Ⅲａ区西側拡張部分（北から）

第41図　Ⅲa区下面及びⅢb区6面全体図（1/100）




1．新たに入れた客作土
2．やや黒味を帯びた暗褐色土
3．灰味を帯びた暗褐色土～灰褐色土
4．暗褐色土
5．1層にほぼ同じ
6．黄白色砂質土
7．暗褐色砂質土（炭化物混入）
8．暗茶褐色土
9．暗褐色土（やや粘質を帯びるが砂性が強い）
10．灰褐色砂～砂質土（流水状）
11．黒灰色粘質土（粘性が強い）→湿地状になる

第42図　Ⅲc区全体図及び土層図（1/100、1/40）

写真47　Ⅲc区東壁土層

残したものであろう。地山面直上の堆積土より弥生時代中期後半の遺物が出土している。各面の時期は1・2面が中世、3が古代、4～6面が古墳時代後期（～一部古代）の遺構面と考えられる。

Ⅲ区の主な検出遺構としては中世の鍛冶炉・掘立柱建物・井戸・土坑・溝、古代の掘立柱建物・柵状遺構・土坑・溝、古墳時代後期の竪穴住居跡、弥生時代後期の土坑等をあげることができる。この中で特に古墳時代後期～古代の遺物が主体を成し、今回の調査の中心を占めている。7世紀後半～8世紀前半には梁行1間の狭長な建物が3棟確認され、これに先行する可能性も考えられる柵状遺構も認められる。なおⅢa区西側拡張部分及びⅢc区は柵状遺構の広がりを確認する為に調査区を拡張・設定したものであるが、柵状遺構の北側屈曲部分は確認できていない。また出土遺物としては新羅土器が注目される遺物であり、Ⅰ区出土例と合わせ今回の調査で計5点出土している。

## 2　遺構と遺物

### 1）　掘立柱建物（SB）

掘立柱建物は現状で5棟確認している。中でも7世紀後半～8世紀前半の3棟（192・193・194）

写真48　Ⅲa区南壁土層

写真49　Ⅲa区北壁土層

は主軸方向が揃う建物群であり、後述する柵状遺構とは切り合う関係にある。この他にも特にⅢa区南側では特に柱を多数確認しているが、建物としてまとめきれていない。

SB 191（第44図）

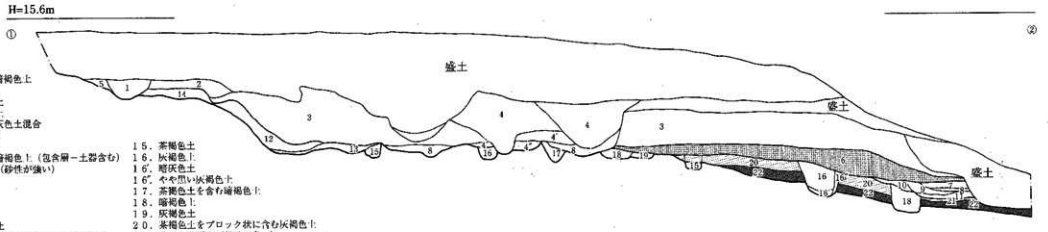
Ⅲa区谷部上面及びⅢb区2面で確認する。主軸方位をN－33°－Wにとる建物である。柱間が不均等であるが2m前後を単位として考えると3間×4間の建物となり、屋内及び周辺部に束柱状のものや間仕切り状の柱列が配されている。柱掘り方は径20～30cmで、残存している柱は径10cm強を測る。北側屋内に径70cm、深さ7cmの土坑（SK 176）が認められる。断面浅皿状で、埋土には炭化物を含み、鍛造剝片が少量出土する。建物及び鍛冶関連遺構との関係については不明である。出土遺物は少量で時期を明らかにすることはできないが13世紀後半～14世紀代の間に考えておきたい。

出土遺物（第44図）　209は無文の青磁口折皿である。釉調は明緑灰色を呈する。210は土師器皿である。外底面糸切りを行い、復元口径は8.8cmである。

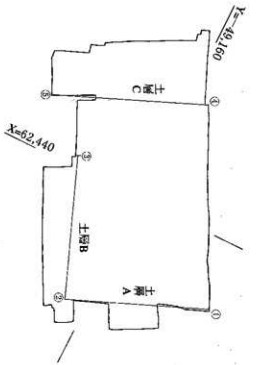
SB 195（第45図）

Ⅲb区3面で確認する。建物の規模については明らかでないが、根石を有するピットを中心に拾い

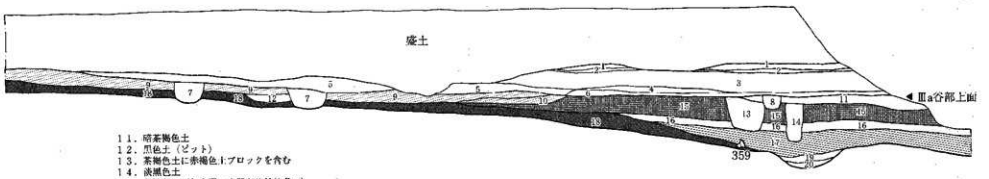
## 土層A




1．しまりのない暗褐色土
2．暗褐色土
3．やや明るい褐色土
4．汚れた黄褐色土
4'．暗褐色土に青灰色土混合
4''．4'にほぼ同じ
5．汚れた橙色土
6．黒味を帯びた暗褐色土（包含層－土器含む）
7．灰褐色砂質土（砂性が強い）
8．黒褐色土
9．灰褐色土
10．黒色土
11．7層に同じ
12．汚れた黄褐色土
13．青灰色粘質土（ベタベタする）滯留流水
14．黄褐色土をブロック状に含む暗褐色土
15．茶褐色土
16．灰褐色土
16'．暗灰色土
16''．やや黒い灰褐色土
17．茶褐色土を含む暗褐色土
18．暗褐色土
19．灰褐色土
20．茶褐色土をブロック状に含む灰褐色土
21．黄褐色砂質土（細砂が多い）
22．均質な暗褐色土（遺物はほとんどなく均質）

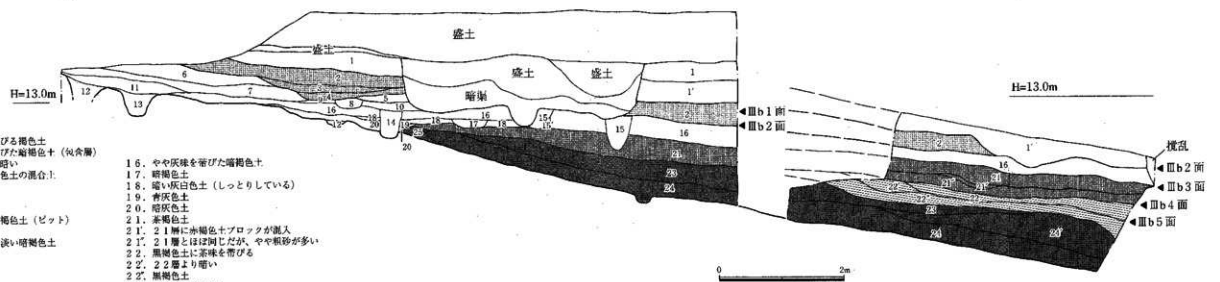



## 土層B



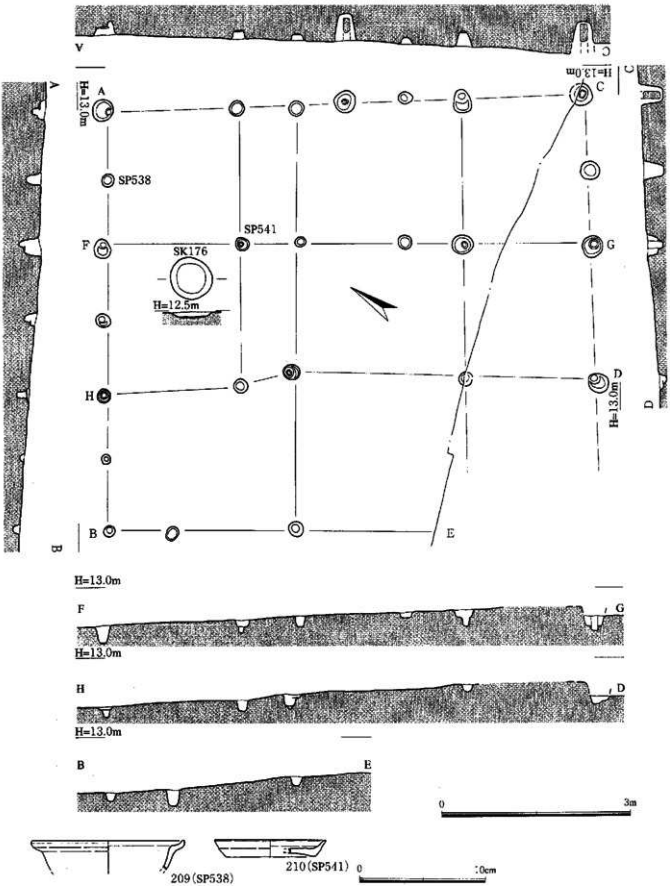

1．黄褐色シルト
2．粗砂
3．黄褐色砂質土
4．黄褐色シルト
5．黄褐色シルト
6．青灰色シルト
7．黒褐色土に赤褐色土ブロック少量を含む（ピット）
8．黄褐色土（ピット）
9．灰褐色砂質土に赤褐色土ブロックを含む
10．暗赤褐色土に暗褐色土ブロックを少量を含む
11．暗茶褐色土
12．黒色土（ピット）
13．茶褐色土に赤褐色土ブロックを含む
14．淡黒色土
15．黒褐色土（包含層－土器が比較的多い）
16．赤褐色土
17．黒色土（粘性が強くベタッとするが、比較的均質である。18層と同じ弥生の自然堆積か）
18．茶褐色土
19．黒灰色粘質土
20．青灰色粘質土
} 谷の自然の窪みに堆積

## 土層C

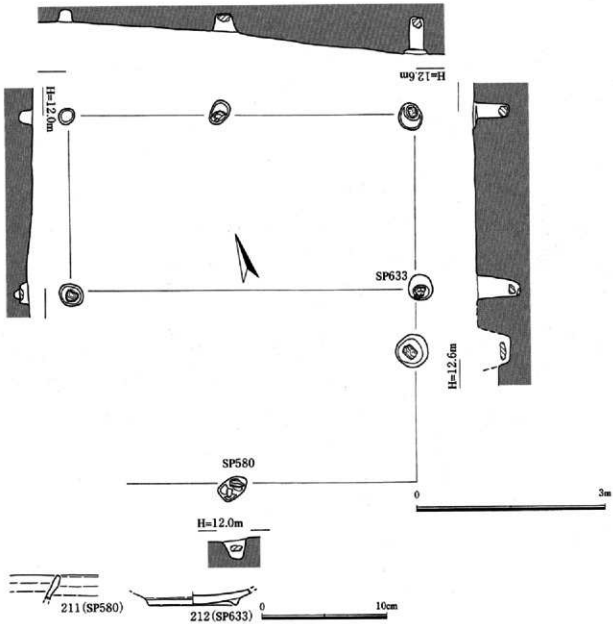



1．褐色土
1'．やや茶味を帯びる褐色土
2．やや黒味を帯びた暗褐色土（包含層）
3．2層よりやや暗い
4．暗褐色土と褐色土の混合土
5．暗褐色土
6．茶褐色土
7．5層に同じ
8．黒味の強い暗褐色土（ピット）
9．暗茶褐色土
10．7層よりやや淡い暗褐色土
11．茶褐色土
12．茶褐色土
13．青灰色土
14．暗青灰色土
15．暗褐色土
15'．暗青灰色土
16．やや灰味を帯びた暗褐色土
17．暗褐色土
18．暗い灰白色土（しっとりしている）
19．青灰色土
20．暗灰色土
21．茶褐色土
21'．21層に赤褐色土ブロックが混入
21''．21層とほぼ同じだが、やや粗砂が多い
22．黒褐色土に茶味を帯びる
22'．22層より暗い
22''．黒褐色土
23．やや淡い暗褐色土
24．暗褐色土（均質で遺物はほとんどなし）
24'．24層に茶味を帯びる
25．黒褐色土

第43図　Ⅲ区上層図（1/60）




第44図　SB191及び出土遺物実測図（1/60、1/3）




第45図　SB195及び出土遺物実測図（1/60、1/3）

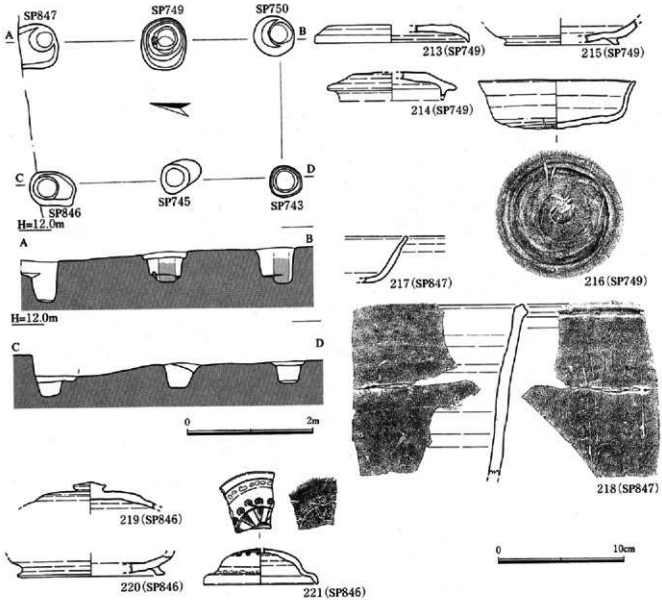
上げることができる。主軸方位はN－20°－Eとなり、2面確認のSB 191とは明らかに方位が異なる。またSB 191には根石は認められない。時期は不明確だが中世前半代であろうか。

出土遺物（第45図）　211は土師器坏の口縁部破片である。212は瓦器椀の底部である。

SB 192（第46図）

Ⅲb区4面で検出する。現状では1間（2.3m）×2間（3.8m）分確認しているが、桁方向は更に北側に延びる可能性が考えられる。主軸方位は丘陵斜面等高線に平行するN－10°－Wである。また建物は4面で検出してい

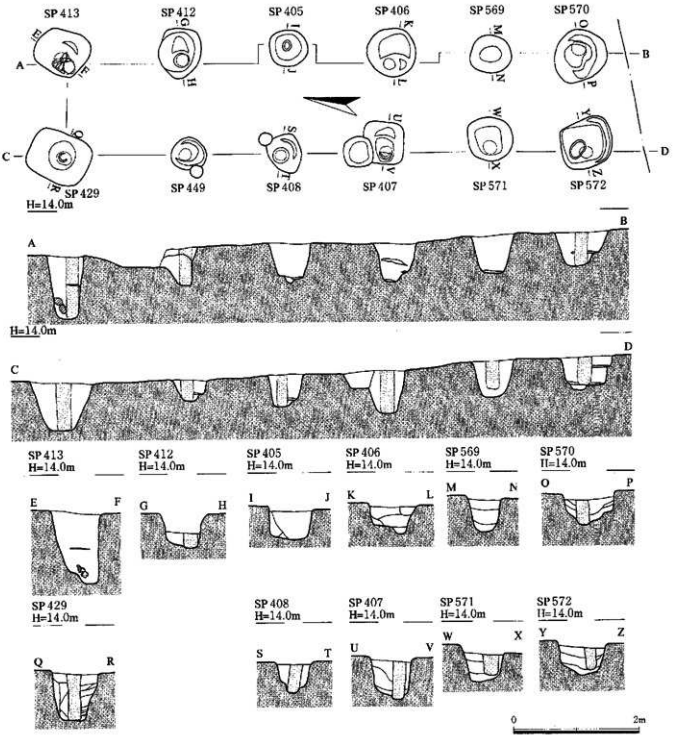
写真50　SB192（南から）




第46図　SB192及び出土遺物実測図（1/60、1/3）

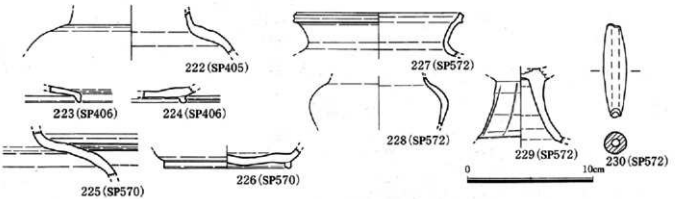
写真51　SB192出土遺物（221）

写真52　SB192内SP749遺物出土状況（南から）




第47図　SB193実測図（1/60）

るが、壁際の土層で確認したところ3面からの掘り込みであることが判明している。ピットの基本埋土は上半2/3が黄灰褐色土、残りが粘性の強い灰色土で、底面付近に黒色土が数センチ堆積している状況である。出土遺物としてはSP846の新羅土器蓋破片が注目される。検出面から30cmの標高12mのピット壁際灰色土層から出土している。またSP749の底面には完形の須恵器坏が埋置されてい




第48図　SB193出土遺物実測図（1/3）

写真53　SB193、194（西から）

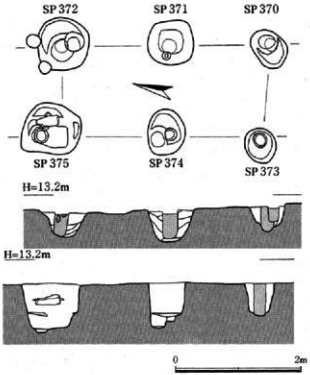
写真54　SB193（北から）

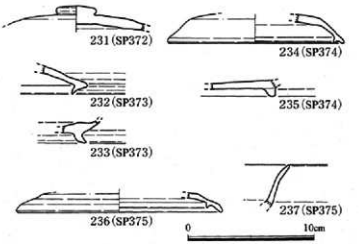
る。7世紀後半代に位置付けられる。

出土遺物（第46図）　213～216はSP 749出土遺物である。213・214は須恵器蓋である。213・214はいずれも天井部ヘラ切りを行う。215は高台付の坏である。高台端部は外方に引き出す。216は底面出土の完形坏である。口縁部は外反し、底部はやや丸みを帯びる。また外底面はヘラ切りの後未調整であり、工具が当たった痕跡が残る。217・218はSP 847出土である。217は土師器坏である。摩滅が進んでいるが横方向の磨きが残る。218は須恵器甕破片であろうか。内面横ナデ、外面横ナデの後縦方向のヘラナデを行う。219～221はSP 846出土である。219・220は須恵器である。220は高台付き坏、219はつまみ付き蓋である。蓋天井部には回転ヘラ削りが行われる。221は新羅土器蓋である。外面全体に自然釉が付着し、つまみを欠失する。天井部に2条の沈線を巡らせ、その間にヘラ描きの三角形文を刻み、外側にはスタンプによる円弧文を配する。

SB 193（第47図）

Ⅲa区中央南端部で検出する狭長な掘立柱建物である。現状では1間（1.5m）×5間（8.3m）分確認しているが、桁方向は更に南側に延びる可能性が考えられる。主軸方位はSB 192と同様にN－10°－Wである。柱穴掘り方は円形～隅丸方形を呈する。埋土は灰褐色砂質土を主体とし、底部付近




第49図　SB194及び出土遺物実測図（1/60、1/3）

写真55　SB194（西から）

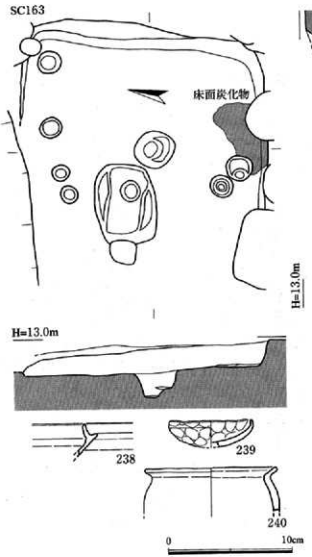
には黒灰色土が堆積している。柱痕跡が残るものも半数程度あり、柱径は20～25cmを測る。8世紀前半代に位置付けられる。

出土遺物（第48図）　222はSP 405出土の須恵器壺肩部である。223・224はSP 406出土である。223は口縁端部を折り曲げる須恵器坏蓋である。224は土師器坏である。高台がやや外方に張り出す。225・226はSP 570出土で、共に須恵器である。225は2条の沈線を施す壺である。226は高台付きの坏である。外底面はヘラ切り未調整のままである。227～230はSP 572出土である。227～229は須恵器である。227は甕の口縁部、228は小型壺である。229は焼成不良で表面の一部が還元色を呈する高坏である。230は土錘である。

SB 194（第49図）

Ⅲa区南西端部で検出するな掘立柱建物である。1間（1.5m）×2間（3.4m）で、主軸方位はSN－14°－Wである。柱穴掘り方は円形呈し、埋土は灰褐色土を主体とする。柱痕跡が残るものも4基あり、柱径は20cm前後を測る。7世紀後半代に位置付けられる。

出土遺物（第49図）　231はSP 372出土の須恵器蓋である。天井部には回転ヘラ削りを行う。232・233はSP 373出土の須恵器である。232はかえりを有する蓋である。233は高台端部を外側に大きく引き出す。234・235はSP 374出土である。234はかえりを有し、天井部ヘラ切り未調整の須恵器蓋である。235は土師器坏である。236・237はSP 375出土の須恵器である。236はかえりを有す蓋、237は口縁部が外反する坏である。




第50図　SC163、169及び出土遺物実測図
(1/40、1/3)

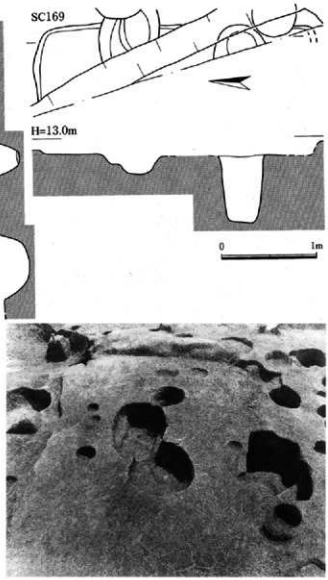



写真56　SC163（西から）

2）　竪穴住居跡（SC）

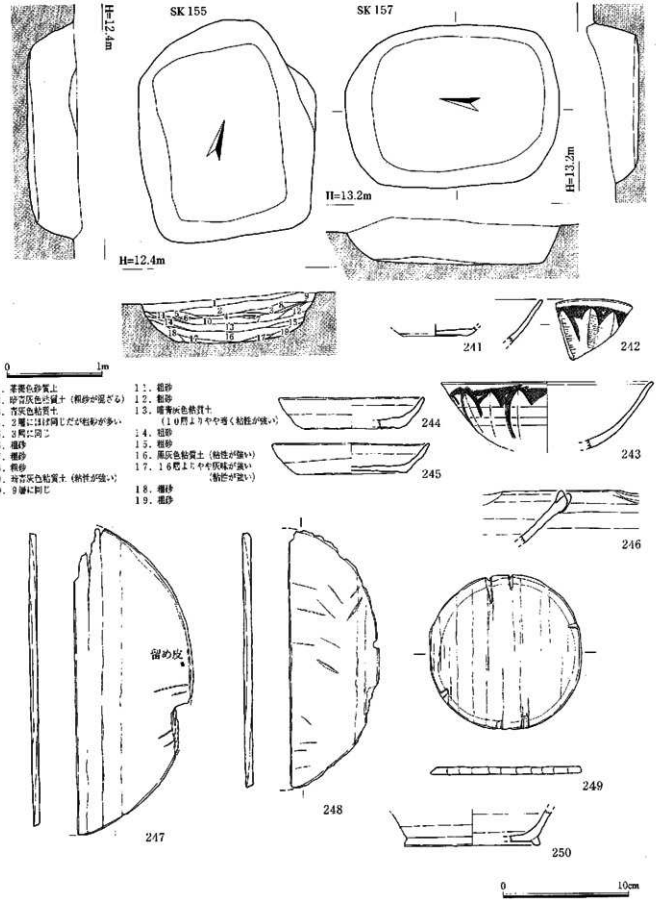
SC 163（第50図）

Ⅲa区で検出する。南北長2.5m、東西長3m以上の平面長方形を呈し、検出面からの深さ30cmを測る。埋土は黄褐色土ブロックを含む暗褐色土である。南側壁沿いに床面上に炭化物が広がる部分があるが、粘土などは認められない。主柱穴は中央の2本が想定できる。遺物は少量であるが土師器・須恵器の小破片が出土する。

出土遺物（第50図）　238は須恵器坏身破片である。立ち上がりは短く内傾する。239は土師器小椀である。240は外面～口縁部内面に2次焼成を強く受けた土師器甕である。

SC 169（第50図）

Ⅲa区西端で確認する。調査区境界にかかり形状は不明な点が多い。南北長は3m程度に復元でき、検出面からの深さは10cm程度である。また埋土は灰褐色土である。遺物は土師器・須恵器小破片のみである。




第51図　SK155、157及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

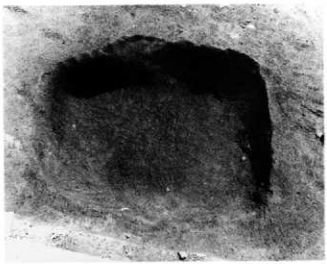
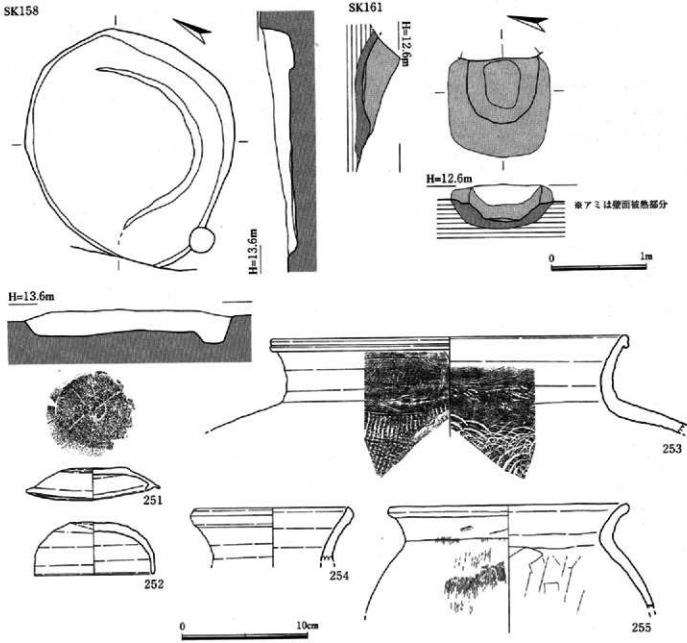


写真57　SK155（西から）

写真58　SK155土層




第52図　SK158、161及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

写真59　SK157（西から）

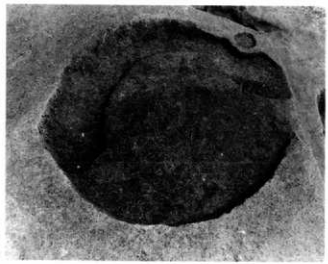


写真60　SK158（北から）

写真61　SK164（南から）

写真62　SK164土層

3）土坑（SK）

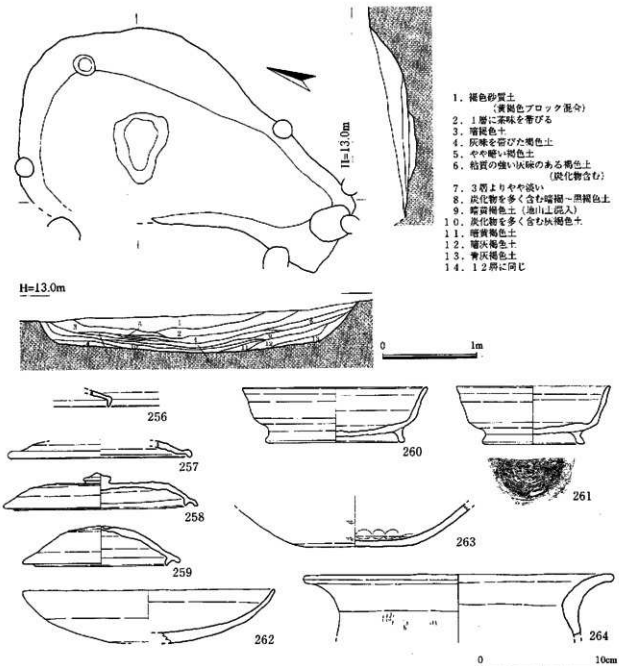
SK 155（第51図）

Ⅲa区谷部分上面で検出し、SD 162埋土を切る。2.3×1.85mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ55cmを測る。断面皿状を呈し、埋土には粗砂を多く含みレンズ状に堆積する。形状・時期等の近似性から5次調査SK 101・102（第27図）に類似する遺構の可能性が考えられる。陶磁器、土師器、須恵質土器、木器が出土する。木器は16層から主に出土している。13世紀中頃～14世紀初頭の遺構であろう。

出土遺物（第51図　241～249）　241は外底の釉を掻き取る白磁皿である。242・243は鎬連弁を施す龍泉窯系青磁碗である。244・245は糸切りを行う土師器坏である。246は須恵質の片口鉢である。247・248はモミの板目材か。247には桜皮が残っている。共に曲げ物の部材である。249はスギの柾目材である。容器の底もしくは蓋であろう。

SK 157（第51図）

Ⅲ区谷部上面で検出する。2.2×1.75mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ55cmを測る。断面皿状を呈し、埋土はレンズ状に堆積する。上層は暗灰色土、下層は灰色砂質土と黄褐色土の混合土で




第53図　SK164及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

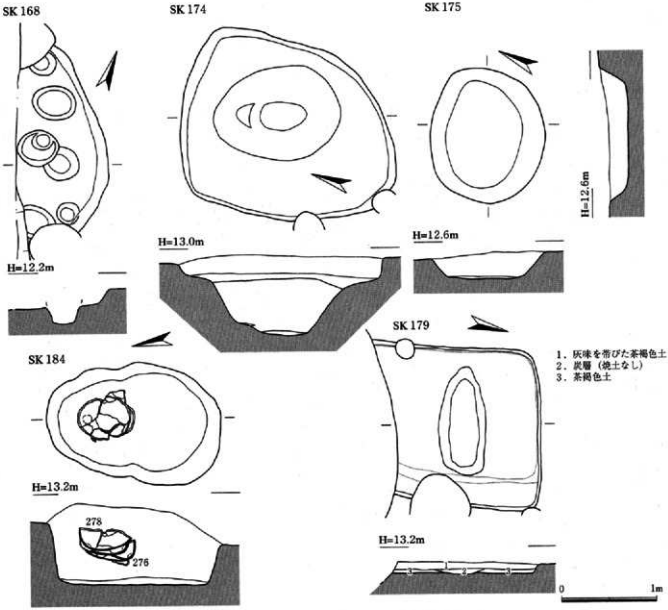
ある。土師器・須恵器の小破片が少量出土するのみで、陶磁器類は認められない。

出土遺物（第51図　250）　須恵器椀の底部である。外底面はヘラ切り未調整である。

SK 158（第52図）

Ⅲa 区中央整地層上面で検出する。径2.2～2.5mを測る略円形土坑である。南側半分の壁際には深さ10cm程度の周溝状の掘り込みを有する。埋土はやや砂性を帯びる褐色土である。土師器・須恵器の破片が出土する。また15cm角の板状滑石が出土しているが、チップ等は認められない。

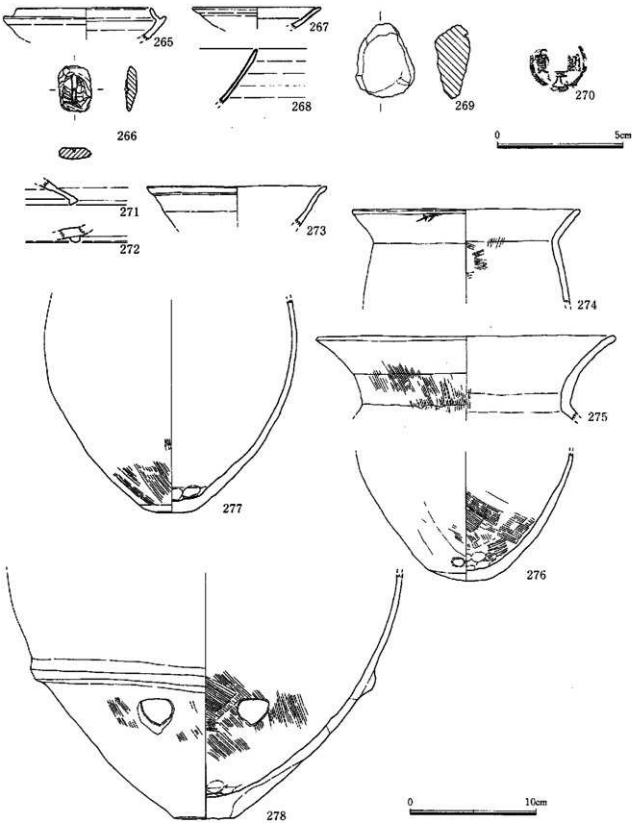
出土遺物（第52図）　251～254は須恵器である。251はかえりを有する坏蓋である。外底面はヘラ




第54図　SK168、174、175、179、184実測図（1/40）

写真63　SK184（西から）

写真64　SK179土層




第55図　SK168、174、175、179、184出土遺物実測図（270は2/3、その他は1/3）

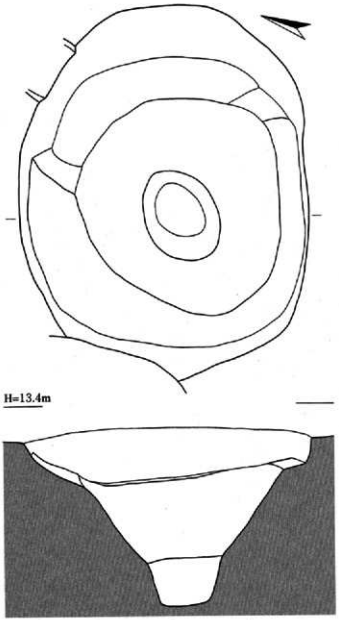


写真65　SE173、SK174（東から）

写真66　SE173（南から）

第56図　SE173及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

切り未調整である。252は回転ヘラ削りを行う壷である。253・254は甕である。255は土師器甕である。胴部外面縦刷毛、内面縦方向のヘラ削りを行う。

SK 161（第52図）

Ⅲa区南側で検出する。SB 194を構成するSP 375に切られる。40×50cm程度の掘り方及び周辺部が被熱赤変する。掘り方の埋土は灰褐色土で炭化物はほとんど見られない。埋土は全量水洗を行ったが遺物は出土していない。壁体は見られず、被熱痕跡に還元帯も形成されていない。

SK 164（第53図）

Ⅲa区谷部上面で検出する。谷部に設定したトレンチにかかったため、西側壁の一部を失っている。本来は長軸3.2mを測る隅丸長方形に近い形状を呈するものと考えられる。埋土はレンズ状に堆積し、互層状に炭化物を含んでいる。土師器・須恵器がコンテナ3箱程度出土している。7世紀後半～8世紀の初頭の中で考えておきたい。

出土遺物（第53図）　256～261は須恵器である。256～259は壷である。259はつまみが欠失しており、天井部はヘラ切り未調整である。260・261は高台付き坏である。外底面は回転ヘラ削りを行い、高台端部は外側に引き出している。262～264は土師器である。262・263は皿である。摩滅が進んでおり、調整は不明である。264は口縁部が大きく開く甕である。

SK 168（第54図）

Ⅲa区西側拡張部分で検出する。西側を調査区外に延ばすため形状は不明瞭であるが、やや歪な円形を呈する土坑であろうか。検出面からの深さ20cmを測り、床面は平坦である。埋土は灰褐色土に黄褐色土ブロックを混合している。土師器・須恵器小破片と滑石製品が出土している。

出土遺物（第55図　265・266）　265は立ち上がりを有する須恵器坏身である。266は2.7×3.6cmの板状滑石製品である。断面形は中央がややふくらみを持つ。上面中央に溝を刻み、その中央部分に中途までの穿孔を行っている。下面は削りによって平滑に仕上げようとしている。

SK 174（第54図）

Ⅲb区3面で検出し、SE 172を切る土坑である。検出面から上段部を30cm程掘り下げ、更に中央部を円形に50cm掘削している。埋土は上段が褐色砂質土、中央部の掘り込みは上層が粘性の強い青灰色土、下層壁際に貼り付くように粗砂が堆積している。白磁・青磁・土師器・須恵器の小破片が出土している。中世前半代に位置付けられる。

出土遺物（第55図）　267は白磁皿である。内面に1条の圏線が巡る。268は白磁碗である。内面に薄い圏線が認められる。

SK 175（第54図）

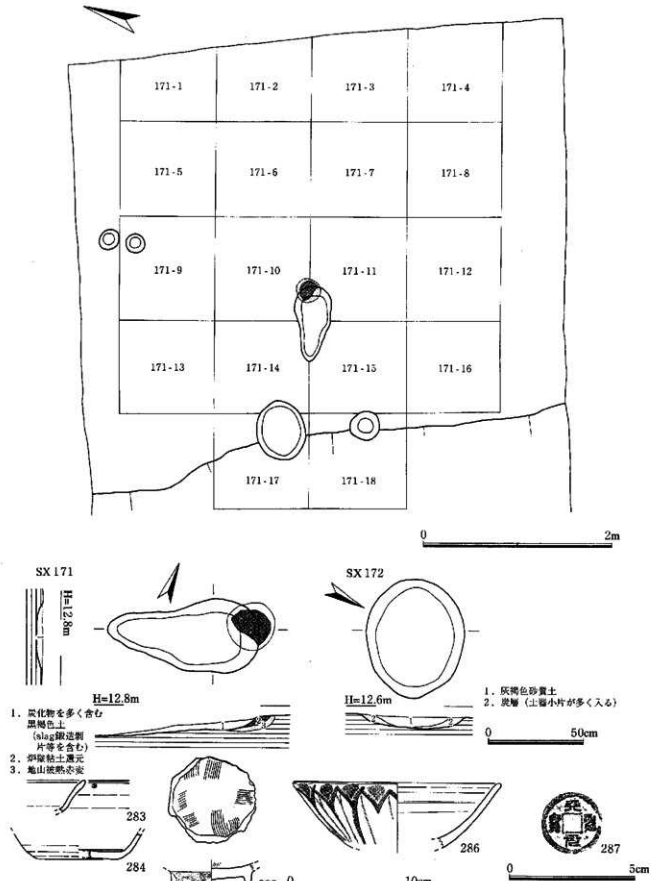
Ⅲb区2面、SB 191内西端で検出するが建物との関連については不明である。平面1.2×1.4mの長円形の土坑である。埋土は炭化物を含む暗褐色土である。小破片のみで時期は不明瞭であるが、検出面より13～14世紀の遺構と考えられる。

出土遺物（第55図　269・270）　269は錆化により形状不明となっている。平面三角形状の塊状鉄製品である。270は「□元通寶」と読めるが銭種は不明である。

SK 179（第54図）

Ⅲb区3面で検出する。検出面からの深さ10cm程の方形上坑である。1層を除去すると3層が貼り床状の面となり、2層（炭層）の掘り込みが行われる。土師器・須恵器のほか1点瓦器破片が出土。

出土遺物（第55図　271～273）　271・272は須恵器である。271は壷、272は高台付き坏である。273は摩滅の進んだ瓦器椀の口縁部である。口縁部外面は僅かに外面に肥厚する。




第57図　SX171、172及び出土遺物実測図（1/40、1/20、287は2/3、その他は1/3）

写真67　SX171土層

写真68　SX172土層

鍛冶関連出土遺物一覧表

| | | 171 | 172(1層) | 172(2層) | 171-1 | 171-2 | 171-3 | 171-4 | 171-5 | 171-6 | 171-7 | 171-8 | 171-9 | 171-10 | 171-11 | 171-12 | 171-13 | 171-14 | 171-15 | 171-16 | 171-17 | 171-18 | 総計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1mm以下 | 粘状滓 | 0 | 0.03 | 0.05 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.08 |
| 2.5～1mm | 粘状滓 | 0.44 | 1.76 | 0.71 | 0.07 | 0 | 0.05 | 0.06 | 0 | 0.05 | 0.04 | 0 | 0 | 0.05 | 0 | 0.03 | 0 | 0.11 | 0.02 | 0.04 | 0.17 | 0.02 | 3.66 |
| | 鍛造剥片 | 1.37 | 16.94 | 5.91 | 0.54 | 0.3 | 0.32 | 0.39 | 0.23 | 0.36 | 0.3 | 0.45 | 0.71 | 0.36 | 0.35 | 0.93 | 0.18 | 1.07 | 0.83 | 0.52 | 0.92 | 1.58 | 0.25 | 32.7 |
| | 鉄滓 | 22.05 | 12.11 | 5.48 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 39.79 |
| 5～2.5mm | 粘状滓 | 5.02 | 0.99 | 1.32 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5.33 |
| | 鍛造剥片 | 0 | 5.55 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.33 | 0.13 | 0.17 | 0.43 | 0 | 0.24 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6.85 |
| | 鉄滓 | 17.34 | 19.32 | 12.46 | 1.72 | 0.95 | 0.65 | 0.52 | 0.72 | 0 | 0 | 1.19 | 0.43 | 0 | 0 | 0.85 | 0.21 | 0.7 | 1.01 | 1.37 | 3.34 | 0.39 | 0.43 | 67.57 |
| 5mm以上 | 粘状滓 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 鍛造剥片 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 鉄滓 | 62.34 | 95.73 | 97.76 | 5.32 | 11.36 | 3.35 | 6.32 | 11.82 | 9.46 | 4.22 | 9.71 | 3.6 | 9.9 | 3.02 | 1.06 | 5.43 | 0.74 | 9 | 3.27 | 9.2 | 1.09 | 311.83 |
| その他 | | 67.15 | 101.42 | 27.5 | 63.57 | 42.06 | 65.63 | 45.92 | 45.28 | 47.52 | 54.61 | 13.72 | 47.78 | 30.67 | 33.36 | 56.8 | 35.44 | 58.9 | 45.99 | 68.99 | 55.81 | 62.04 | 1136.79 |
| 炉壁 | | | | | | | 84.06 | 7.79 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鉄滓 | | | | | | | 38.16 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 鍛造剥片総計 | 1.37 | 22.49 | 5.91 | 0.54 | 0.3 | 0.32 | 0.39 | 0.23 | 0.36 | 0.3 | 0.45 | 0.71 | 0.36 | 0.35 | 0.93 | 0.18 | 1.07 | 0.83 | 0.52 | 0.92 | 1.58 | 0.25 | 39.55 |
| | 粘状滓総計 | 5.46 | 2.75 | 2.03 | 0.07 | 0 | 0.05 | 0.06 | 0 | 0.05 | 0.04 | 0 | 0 | 0.05 | 0 | 0.03 | 0 | 0.11 | 0.02 | 0.04 | 0.17 | 0.02 | 9.07 |
| | 鉄滓総計 | 101.72 | 127.16 | 85.7 | 6.04 | 12.31 | 42.36 | 6.84 | 12.54 | 9.46 | 4.22 | 1.9 | 4.23 | 0.9 | 3.02 | 2.51 | 5.64 | 1.44 | 4.01 | 4.64 | 12.54 | 1.48 | 455.35 |

※「その他」は粉末状になった関連遺物

SK 184（第54図）

Ⅲb区３面であるが、地山面で検出した遺構である。長円形土坑の底面から10cmほど浮いた位置で３個体の底部が重なった状態で出土した。甕は斜めに据えられていたようであるが、削平により埋置状況に不明な点も残る。弥生時代後期に位置付けられ、本調査区内で最も古い時期の遺構である。

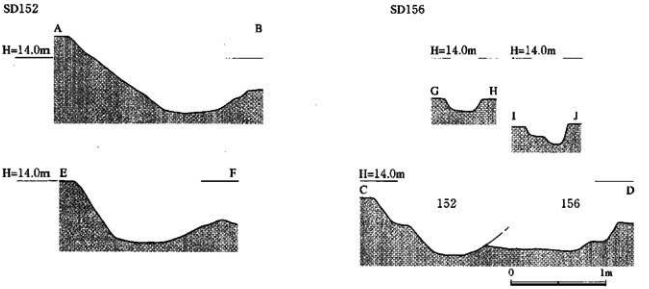
出土遺物（第55図　274～278）　274・275は甕口縁部である。276～278はレンズ底状の底部を有する胴部下半である。器面の摩滅が進んでいるが277の内面を除いて刷毛目による調整が残る。278は断面台形の突帯を有し、焼成後に内面から１箇所穿孔を行う。

４）井戸（SE）

SE 173（第56図）

Ⅲb区３面で検出し、SK 174に切られている。平面３×４ｍの長円形を呈し、検出面からの深さ1.8ｍを測る。埋土は大きく３層に分かれ検出面から40cmは褐色土、1.3ｍ迄は粘性の強い青灰色土で粗砂をラミナ状に含む、以下底面までは粗砂層となる。中間層の下位からは植物の自然遺体が出土している。土師器・須恵器・瓦器・滑石製品等が出土し、陶磁器類は見られない。12世紀代の井戸と考えておきたい。

出土遺物（第56図）　279～281は瓦器椀である。280内面は斜方の磨き痕跡が残る。282は丸瓦である。凸面は長軸方向にナデを行い、凹面には布目が残る。




第58図　SD152、156断面図（1/40）

5）鍛冶関連遺構（ＳＸ）

SX 171・172（第57図）

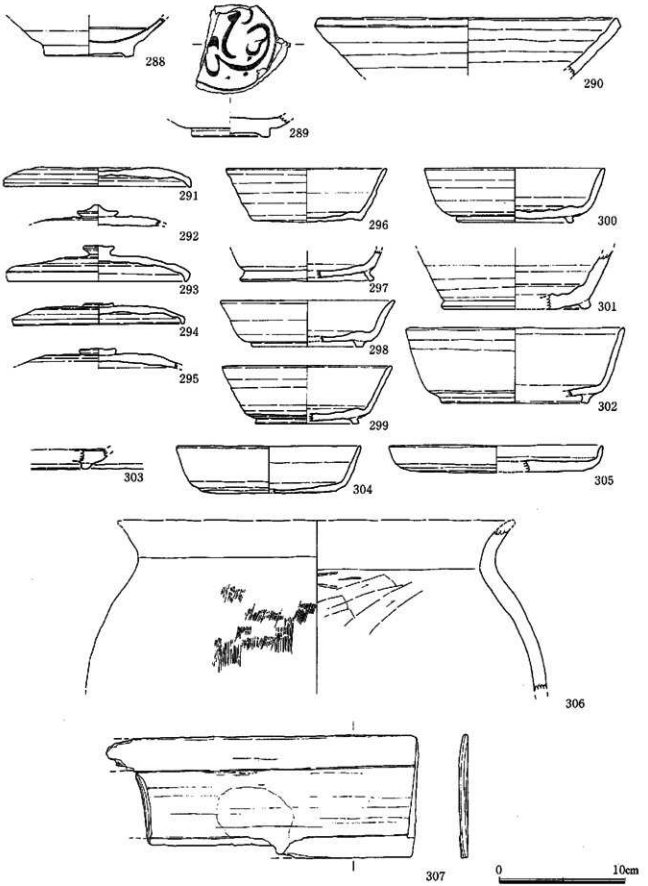
Ⅲｂ区１面で検出する。SX 171は径25㎝の被熱痕跡及び炉壁粘土が還元された部分およびその西側の不整形の掘り込み部分である。還元粘土の部分が鍛冶炉本体と考えられ、西側の掘り込みは炉本体を破壊しており、操業時に存在したものではないと思われるが、鍛冶作業で排出された遺物が埋土中から多く出土している。SX 172は鍛冶炉から1.2ｍ西側に位置する円形土坑である。ここからも鍛冶排出遺物が多く出土している。また炉周辺の遺構面上に焼土・炭化物が広がっており、炉を中心として１ｍのメッシュを組んで土砂採集→水洗→磁別→ふるい分けを行うことにより鍛冶関連遺物の採集を行った。なお採集に当たっては171、172内埋土は別に採集している。出土鍛冶関連遺物としては鍛冶滓、鍛造剝片、粒状滓、炉壁があり、羽口は見られない。主な出土状況としては粒状滓は171と172から、それぞれ重量比で38％、54％づつ出土しているが、１～2.5㎜の粒径の小さいものは172から出土し、2.5㎜以上のものは171から主体的に出土している。また鍛造剝片については、172で総量の72％出土しているのに比べ171からは３％の出土にとどまっており、周辺土砂からの採集量よりやや多い量しか出土していないことがわかる。また椀形鍛冶滓は見られないが小片化した鍛冶滓・炉壁溶融ガラス質滓等が出土している。以上の排出遺物から本鍛冶炉では鍛錬鍛冶の工程を主体としておこなったものと考えられる。また時期は遺物が少なく不明瞭であるがSB 191に先行するものであり、調査区全体で中世後半代の遺物もほとんど見られないことから、SB 191に近接する14世紀代を考えておきたい。

出土遺物（第57図）　図示した遺物はいずれも171周辺検出面出土である。171・172からは青磁・土師器皿小破片が出土している。283～285は白磁である。283は口禿げの白磁皿口縁部である。284は皿で外底面の釉を刷毛状工具でふき取っている。285は碗である。内底面に櫛目文が施される。286は鎬蓮弁を有する龍泉窯系青磁碗である。287は天聖元寶（初鋳1023年）である。

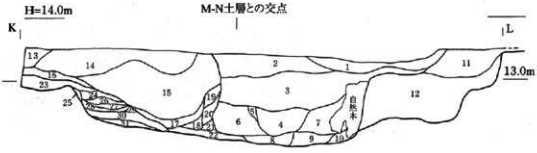
6）溝（SD）

SD 152（第58図）

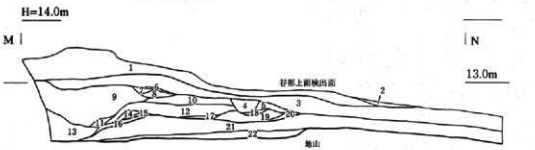
Ⅲａ区東側で検出する。やや蛇行しながら等高線に平行に丘陵上を延びる。高所検出面からの深さ



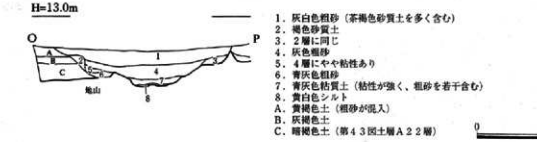

第59図　SD152、156出土遺物実測図（1/3）




1．茶褐色土
2．暗茶褐色土
3．黒灰色粘質土
4．緑灰色土
5．黒色土
6．青緑色砂質土
7．暗灰色土（自然木流入）
8．暗灰色砂質土
9．8層に似る
10．灰色砂質土
1～10層　SD162埋土
11．赤褐色土
12．緑灰色砂質土（自然木流入）
13．暗茶褐色土
14．茶褐色土
15．赤褐色土
16．暗赤褐色土
地山流入土
17．灰白色砂質土
18．暗灰色土
19．赤褐色土
20．緑白色土
21．黄褐色土
22．赤褐色土
23．灰白色粗砂
地山流入土
24．黒灰色土
25．黄褐色土
26．赤白色土
27．26層より白味強い
28．緑灰色土
29．28層に黒灰色土混合
30．黒灰色砂質土（自然木流入）
31．青灰色粘質土




1．暗茶褐色土（M－N土層、2層）
2．灰褐色砂質土
3．茶褐色砂質土（O－P土層、1層）
4．暗灰色土
5．橙色土
6．灰白色シルト
7．橙色土
8．灰白色砂質土
9．黒灰色粘質土（M－N土層、3層）
10．灰色砂質土
11．青灰色粘質土
12．19層よりやや白っぽい
13．青緑色砂質土（M－N土層、6層）
14．青灰色砂質土
15．灰色シルト
16．青灰色砂質土
17．青灰色砂質土
18．青灰色シルト
19．淡黒灰色砂質土
20．19層よりやや黒い
21．灰色粗砂（O－P土層、4層）
22．青灰色砂質土

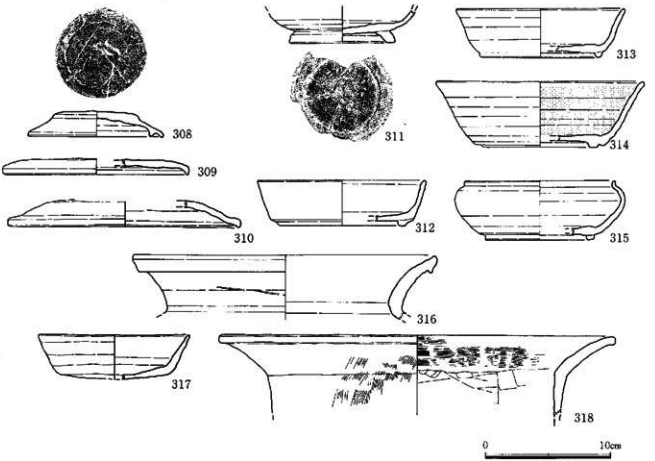



1．灰白色粗砂（茶褐色砂質土を多く含む）
2．褐色砂質土
3．2層に同じ
4．灰色粗砂
5．4層にやや粘性あり
6．青灰色粗砂
7．青灰色粘質土（粘性が強く、粗砂を若干含む）
8．黄白色シルト
A．黄褐色土（粗砂が混入）
B．灰褐色土
C．暗褐色土（第43図土層A22層）

第60図　SD162土層図（1/60）

写真69　Ⅲa区谷部東壁土層

写真70　SD162（東から）




第61図　SD162出土遺物実測図（1/3）

60～80cmを測る。埋土は褐色土主体で、底面付近に暗灰色粘質土が堆積し滞水状況が想定できる。白磁、青磁、土師器、須恵質土器が出土する。13世紀後半代の溝であろうか。

出土遺物（第59図　288～290）　288はⅣ類白磁碗底部である。289は内底面に片彫りの文様を刻む青磁碗である。290は須恵質の捏ね鉢である。

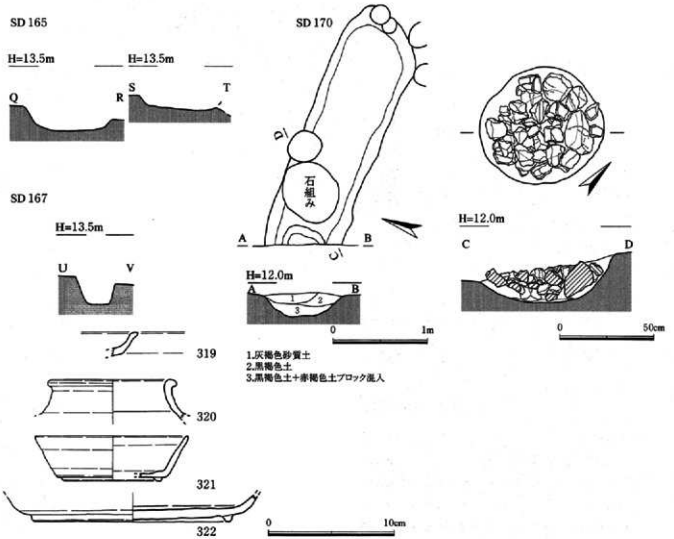
SD 156（第58図）

Ⅲa区東側で検出する。矩形に折れ曲がる溝で、屈曲部分では溝幅が大きく広がる。検出面からの深さは20～30cmである。埋土は灰褐色土である。位置的な関連からSB 193との関連が考えられる。土師器、須恵器がコンテナ5箱分出土している。8世紀前半代に位置付けられる。

出土遺物（59図　291～307）　291～302は須恵器である。291～295は壷である。291は天井部ヘラ切り未調整である。292～295はつまみを有する。295は還元焼成していない。296は高台を付さない坏で、外底面ヘラ切り未調整である。297～302は高台を有する坏身である。外底面は回転ヘラ削りを行う。303～305は土師器坏・皿類である。摩滅が進み調整は不明瞭である。306は土師器甕である。外面縦刷毛、内面ヘラ削りを行う。307はヒノキ板目の板材である。

SD 162（第60図）

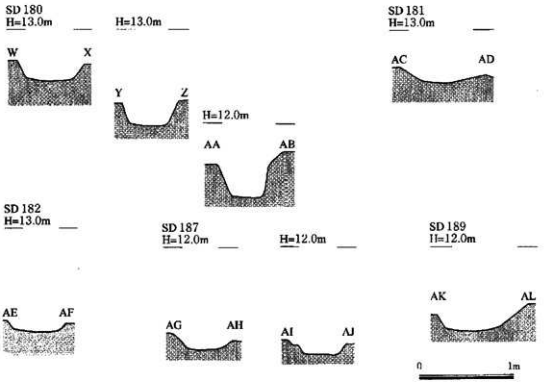
Ⅲa区谷部で検出する。当初上面では確認できず地山面迄掘り下げて明らかになったものであるが、土層観察から谷部上面からの掘り込みであることが確認できた。東側壁際は自然開析により大きく広がり、特に北側下層（K－L土層　23～31層）に流水状の堆積を示す。この後地山土が大きく流




第62図　SD165、167、170及び出土遺物実測図（1/40、1/20、1/3）

写真71　SD170（東から）

写真72　SD170内検出石組み（北から）




第63図　SD180、181、182、187、189断面図（1/40）

入し開析部分が埋没した（K−L土層　11〜22層）後にSD 162を掘削したものと考えられる。溝は斜面に直行して直線的に掘削されている。主軸方位はN−70°−Eである。溝底は数条の流路に分かれているが、その上層には20cm強の粗砂が堆積している。遺物群に近接する時期の溝であり、区画・雨水処理等の機能を有した可能性が考えられる。また314の転用硯は注目される。7世紀後半代の遺物も含むが、8世紀代の遺物を主体とする。8世紀後半の埋没であろうか。

出土遺物（第61図）　308〜316は須恵器である。308〜310は蓋である。308は天井部ヘラ切り未調整である。310は口縁部の折り返しが僅かとなる。311〜314は高台付きの坏である。313は外底面ヘラ切り未調整で、痕跡的に墨痕が残る。314は転用硯である。内底面に明瞭な擦痕が残り、口縁部内面直下まで内面全面に墨が付着する。墨の剝落は進んでいるが付着状態にムラがなく、墨痕跡上端部分が水平になっているため、液体墨を坏内面に溜めていたものと考えられる。315は直口の壺である。316は甕である。317は土師器坏、318は甕である。317は摩滅が進み調整不明である。

SD 165（第62図）

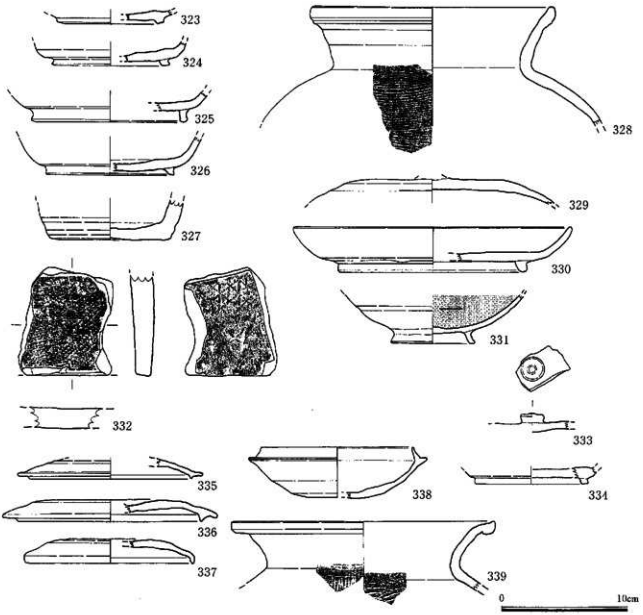
Ⅲa区中央南側で検出する。斜面に平行に掘削される溝で、包含層堆積境界に沿ってほぼ南北方向に延びる。埋土は暗褐色砂質土である。土師器、須恵器の小破片が出土している。

出土遺物（第62図　319）　須恵器Ⅲ小破片である。口縁端部は外側に引き出し、外底面はヘラ切り未調整である。

SD 167（第62図）

Ⅲa・b区北端部で検出する。SE 173に切られる。土層C（第43図）13層に対応しており、上層包含層除去後に確認できる。断面逆台形を呈し直線的に延びる。遺物の大半は8世紀代の土師器・須恵器である。

出土遺物（第62図　320〜322）　320は中国陶器壺である。混入の可能性が高い。321は須恵器高台




第64図　SD180、182、189出土遺物実測図（1/3）

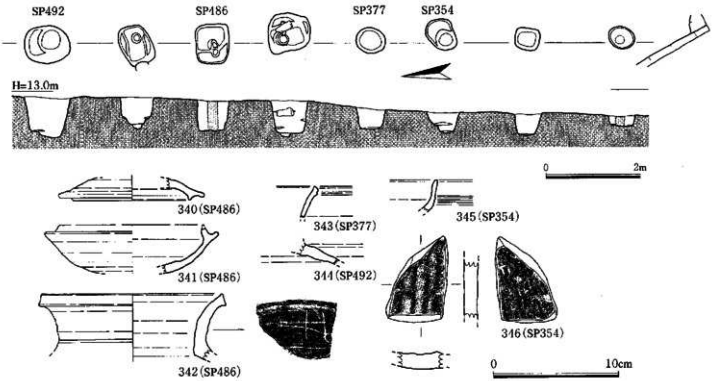
付き坏である。322は土師器高台付き坏である。摩滅のため調整は不明である。

SD 170（第62図）

Ⅲa区西側拡張部分で検出する。幅80cm、深さ25cmを測り、断面浅皿状を呈する。直線的に延びるが西側延長部を調査区外に延ばす。埋土からは土師器・須恵器の小破片が少量出土するのみである。また完掘後に西側底部で径65cm、深さ20cmの円形掘り方内に10cm角の自然礫が充填された状態で検出された。石材はランダムに重なっており、被熱の痕跡は見られない。ここから遺物は出土しておらず時期・用途は不明である。

SD 180（第63図）

Ⅲb区3面で検出する。斜面を蛇行しながら延びる溝である。断面皿状～逆台形を呈し、西側は掘削深が深くなっている。埋土は上半2/3が暗褐色土～黒褐色土で、底面付近が粗砂となっている。出




第65図　SA196及び出土遺物実測図（1/80、1/3）

土遺物は8世紀代の土師器、須恵器が主体となっているが、白磁・瓦器が少量混在している。SB 192を切っており、遺構の時期としては新出の遺物より10～11世紀前後を考えておきたい。

出土遺物（第64図　323～332）　323～328は須恵器である。323～326は高台付きの坏で、外底面はヘラ切りである。327は鉢底部であろう。外底はヘラ切り未調整である。328は甕である。329は土師器蓋である。つまみ部分を欠失する。330は土師器高台付き坏である。331は摩滅が著しいが内黒土師器の椀である。332は焼成須恵質の平瓦である。凸面には斜格子の叩きが残る。

SD 181（第63図）

Ⅲb区3面で検出する。SD 180に切られる。埋土は灰色砂質土である。断面浅皿状で、検出面からの深さは15～20cmである。出土遺物は土師器・須恵器の小破片のみである。

SD 182（第63図）

Ⅲb区3面西側で検出し、SD 180に平行する。埋土は灰色粘質土である。断面皿状で検出面からの深さ10cm程度である。土師器・須恵器の小破片が出土するが時期的にはSD 180に近接する可能性が高いと考えられる。

出土遺物（第64図　333、334）　共に須恵器で、333はつまみ付きの蓋、334は高台付きの坏である。

SD 187（第63図）

Ⅲb区5面西端部で検出する。埋土は汚れた赤褐色土で暗褐色土をブロック状に混合している。断面皿状で検出面からの深さ20cm程度である。土師器・須恵器の小破片が出土する。位置的な関連からSB 192との関連も考えられる。

SD 189（第63図）

Ⅲb区4面北側拡張部分で検出し、SB 192に先行する遺構である。西壁は直に立ち上がり、東壁は

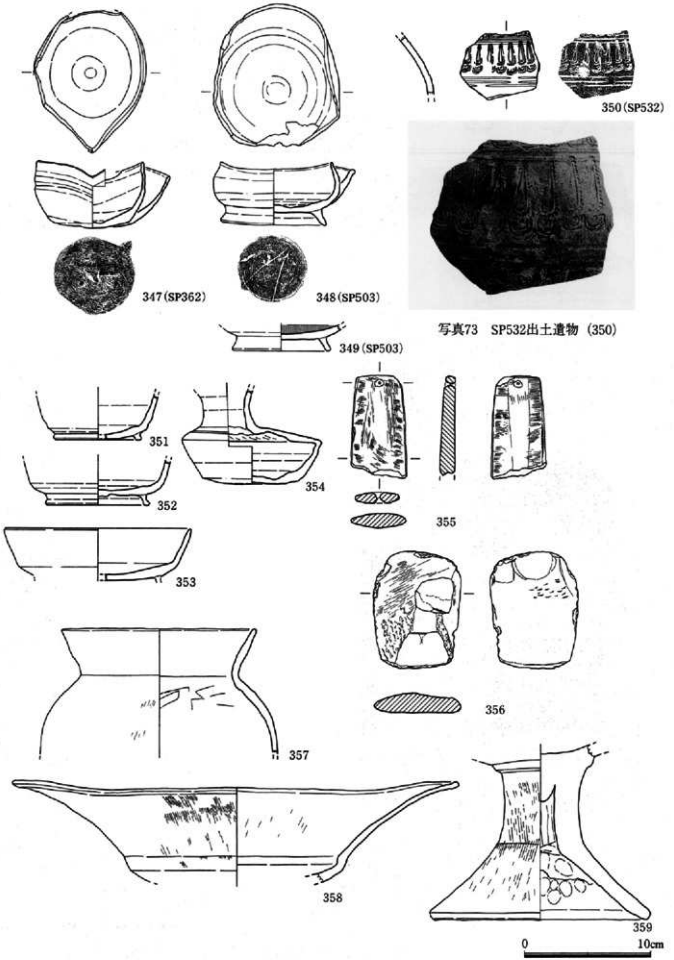
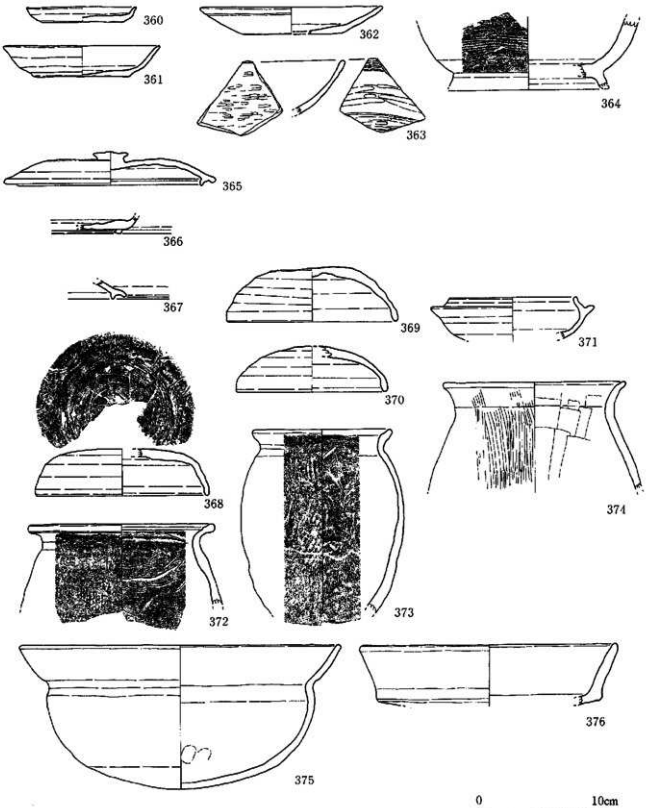
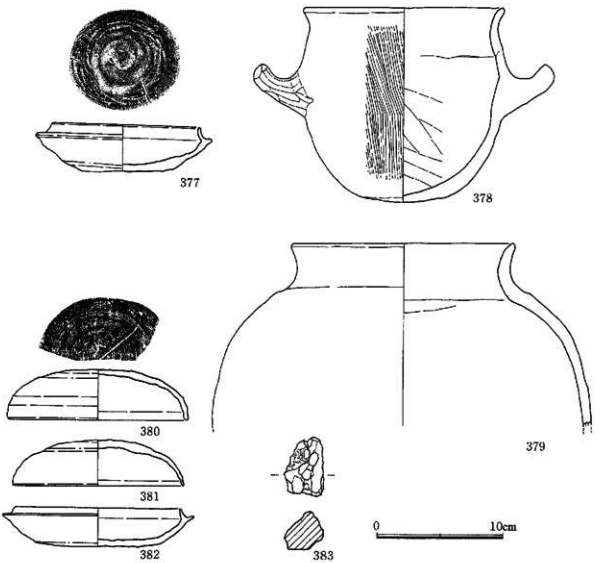



写真73　SP532出土遺物（350）

第66図　ピット出土及び包含層出土遺物実測図１（1/3）




第67図　包含層出土遺物実測図２（1/3）




第68図　包含層出土遺物実測図３（1/3）

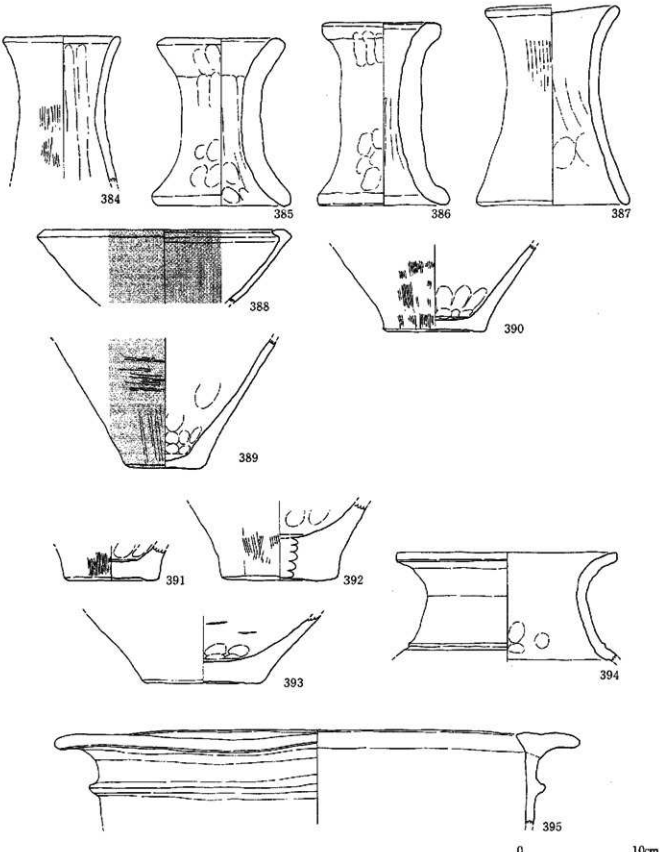
立ち上がりが緩やかである。埋土は灰褐色砂質土～粗砂である。時期的には建物に近接する７世紀後半代が考えられる。

出土遺物（第64図　335～339）　いずれも須恵器である。335・336はかえりを有する壺で、336はつまみが欠失する。337は口縁端部を折り曲げる。天井部外面は回転ヘラ削りを行う。338は立ち上がりを有する身である。339は甕である。外面は擬格子の上からカキ目状に横ナデを行う。

７）柵状遺構（SA）

SA 196（第65図）

Ⅲa区南側で検出し、斜面に斜交して延びる。主軸方位をN－７°－Eのほぼ真北にとり、現状で７間分12m確認している。柱間は1.5～1.7mで、南端のSP 364－758間は２mとなる。延伸方向は南側では調査区外となる。また北側は延長が確認できず、SP 492より西側に折れ曲がる可能性も考えられたため、検討を行いⅢc区の拡張も行ったがこれに対応するピットは確認できなかった。このため現状では直線的な施設として報告しておきたい。位置関係からSB 194と先後関係を有するものと考えられ、出土遺物からはSA 196がこれに先行するものと考えられる。７世紀前半～中頃であろうか。




第69図　包含層出土遺物実測図４（1/3）

出土遺物（第65図）　340～345は須恵器である。340はかえりを有する蓋である。344はつまみ部分が欠失する。天井部には回転ヘラ削りを行う。341は坏身である。外底面は回転ヘラ削りである。345は２条の沈線を有する坏である。342・343は甕の口縁部である。346は焼成軟質赤褐色を呈する平瓦である。凹面には布目と模骨痕が残る。凸面には平行叩きを行う。

８）その他の遺物（第66～69図）

347～350はピット出土の遺物である。347は須恵器椀を片口状に整形したものである。外底面はヘラ切り未調整で、鳥足状のヘラ記号を有する。348は高台付き坏を耳皿状に整形したものである。高台は高めで、外底面は回転ヘラ削りが行われる。349は348と共に出土した内黒の椀であるが、直接伴うものではない。347・348は７世紀後半代に位置付けられ、符徴的な整形から特殊な用途を与えられたものと考えられるが、現状では明らかではない。350は新羅印花文土器の破片である。水滴形文＋円弧文によるスタンプ文が施される。残存部下端に３条１組、上端部に２条１組の沈線が施され、スタンプ文は沈線間及び上端沈線上部の２段に行われている。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。

351～359はⅢａ区包含層出土である。351～355は第43図土層Ｂ９層中からの出土である。351－354は須恵器である。355・356は石器である。355には明瞭な擦痕が残る。356は石斧の残片で敲打痕が認められる。357・358は17層、359は18層出土である。357は土師器甕、358・359は高坏である。359は外面縦刷毛を行い、坏部と筒部の境に突帯を１条貼り付ける。

360～395はⅢｂ区出土である。360・361は１面検出面の土師器坏・皿である。外底糸切りで板状圧痕を有する。362～364は２面の検出面出土である。362は回転ヘラ外面削りを施す土師器坏、363は瓦器椀、364は須恵器椀である。１・２面では時期を示すような良好な遺物は少ない。365・366は３面検出面出土である。共に須恵器で365は天井部回転ヘラ削りを行う蓋、366は外底ヘラ切りの高台付き坏である。367は４面検出の須恵器蓋である。369～376は第43図土層Ｃ22・22′・22″層（土層Ｂ17層に対応）出土遺物である。古墳時代後期の遺物を主体として出土している。368～371が須恵器、372～376は土師器である。377～379及び380～383はそれぞれ第５面検出面でまとまって出土した遺物である。それぞれSX186、SX188として取り上げたが、明瞭な掘り込みがなく22″層中の遺物として図示しておく。377、380～382は須恵器、378・379は土師器、383は鍛冶滓である。384～395は23・24・24′層中から出土した遺物である。384～389は24層中からまとまって出土する。弥生時代中期後半代を主体とした遺物で、丹塗り土器も出土している。

９）小結

ここでは第６次調査の結果をⅢ区の成果を中心に簡単にまとめておきたい。本調査では弥生時代中期後半～中世に至る遺構・遺物を確認している。特にⅢｂ区では谷部堆積土中に複数の遺構面が確認できた。第１・２面は13～14世紀代の遺構面で、３面は飛鳥～古代の遺構面となっている。第４面検出のSB 192も掘り込み面は第３面である。第４面・５面は遺構面土層中から古墳時代後期の遺物が出土しており、おおよそ古墳時代後期～古代の遺構面と考えられるが、実際確認した遺構の大半は上層遺構の掘り残しと考えられる。６面は地山面である。丘陵斜面下位では地山面から掘り込む遺構はなく、東端のSK 184がこの面に対応する遺構と考えられる。また６面直上土層からは弥生時代中期後半の遺物が出土している。

これらの遺構・遺物の中で主体を占めるのが飛鳥～奈良時代を中心とした遺構群である。柵状遺構・掘立柱建物・土坑・溝が確認されている。先行するのが７世紀前半～中頃と考えられるSA 196である。丘陵斜面に斜交し、方位をほぼ真北にとる。具体的な構造は不明な点が多いが、注目される遺構である。次いで斜面に平行する建物群SB 192～194が構築され、SB 193に伴う可能性を有する

SD 156や斜面を直線的に下るSD 162が掘削されている。またSD 162からは転用硯が出土している。建物群は出土遺物からは時期差が認められ、7世紀後半代のSB 192・194、8世紀前半代のSB 193と考えられる。またⅢa区南半（特に西側拡張部分）では建物としてまとめることのできなかった大型のピットが多く、報告分以外にも大型の建物が存在する可能性が極めて高い。本遺跡群周辺の7世紀代の様相は明らかでないが、同じ立花寺遺跡第2次調査では、8世紀前半代の櫓及び倉庫群と8世紀後半～9世紀後半代の初期貿易陶磁器・瓦・権等の注目すべき遺構・遺物が確認されており、調査担当者により古今著聞集に知られる薭田駅の可能性も言及されている。また8世紀後半以降は下月隈C遺跡出土「皇后宮職」木簡、立花寺B遺跡出土初期輸入陶磁器等の資料が知られており、官衙的な様相を呈する遺物が知られている。今回の調査成果もこのような流れの中で理解していく必要があろう。また第5・6次調査区出土の新羅土器（109・184・207・221・350）はいずれも小破片で、時期的にも不明瞭な点もあるが比較的まとまった出土例として注目される。それぞれの文様構成及び共伴遺物に差異が認められ、時期的な位置付けも問題となるであろうが、薭田駅の記載にもある様に調査地点周辺には大宰府へ至る官道の存在も想定でき、そのルート上に位置する本遺跡群から新羅土器が出土することは、該期の遺構群の性格を考える上でも示唆的な事例となるであろう。

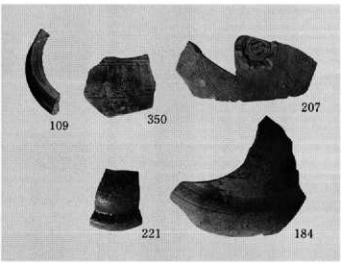



写真74　出土新羅土器

写真75　作業風景

福岡市埋蔵文化財調査報告書第779集

**立花寺5**

－立花寺遺跡群第5・6次調査報告－

2003年（平成15年）3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印　刷　有限会社浦永印刷
福岡市東区原田1丁目9－23